

石川県埋蔵文化財情報

第 17 号

巻頭図版 (大谷中学校東遺跡、大川遺跡)

平成18年度上半期の調査から調査部長 湯尻 修平…(1)

発掘調査略報

大谷中学校東遺跡.....(3)

宿神社前遺跡.....(5)

正友じんとくじま遺跡.....(7)

三日市A遺跡.....(9)

大川遺跡.....(10)

水田丸遺跡.....(12)

平成18年度上半期の遺物整理作業.....(13)

環日本海交流史研究集会の記録

「縄文時代の装身具-漆製品、石製品を中心として-」

はじめに.....所長 谷内尾晋司…(17)

発表概要 九州地方の石製装身具-後晩期の玉類を中心とした石材同定-.....大坪 志子…(18)

山陰地方における縄文時代の装身具.....米田 克彦…(21)

北陸(福井県)における縄文時代の装身具-漆製品、石製品を中心として-.....木下 哲夫…(24)

石川県における縄文人の装い.....西田 昌弘…(27)

富山県における縄文時代石製装身具.....山本 正敏…(31)

新潟県における縄文時代の装身具.....荒川 隆史…(34)

縄文時代の装身具「東北」-漆製品・石製品を中心として-.....小林 克…(40)

縄文時代早期の漆糸製品.....阿部 千春…(43)

北海道の漆製品.....上屋 真一…(46)

討論と展望.....西野 秀和…(49)

調査研究

混和材からみた土器の移動について1-土器の胎土観察から導きだせること-.....久田 正弘…(50)

2007年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター



大谷中学校東遺跡 調査区全景（東から）



大川遺跡 北国街道（第2面）と堀左岸の石垣

平成18年度（2006）上半期の発掘調査から

調査部長 湯尻 修平

平成18年度（2006）は年度当初に20件25遺跡、総面積48,500㎡の発掘調査を受託することで計画を立案した。内訳は国土交通省等国関係事業の調査が5件19,340㎡、県農林水産部関係5件4,620㎡、県土木部10件24,540㎡である。20件のうち今年度も能登地域の調査箇所が多く七尾城跡など11件があり、継続調査は白江梯川遺跡など9件であった。

県教員委員会から年度前半の時点で調査箇所の変更協議があり、堅田C遺跡と五郎左エ門分遺跡の調査を取りやめて、若緑ヒラ野遺跡と水田丸遺跡の調査を実施することになり、最終的には全体で20件25遺跡、総面積42,980㎡の発掘調査を実施した。

本書では4～8月に実施した6件の調査成果を紹介した。珠洲市大谷中学校東遺跡は古墳時代後期から古代にかけての製塩遺跡であり、能登外浦では数少ない製塩遺跡の調査例となった。調査区のほぼ中央で古代のコの字形に廻る東西約15m、南北約5m以上の溝が検出されており、区画内に製塩炉が存在したと考えられる。溝は丘陵部からの流水を排除する目的で設けられたようであり、製塩炉の立地に関係した構造の類型の一つとして把握されるものであろう。

珠洲市宿神社前遺跡は弥生後期～古墳前期と中世の集落遺跡とみられ、ほ場整備事業によって影響を受ける排水路部分の限定調査であったが、各々の時代の土坑、溝、柱穴などを検出し、弥生土器、土師器、珠洲焼、木器等が出土した。宝達志水町正友じんとくじま遺跡は、ほ場整備事業による道路整備に関係して調査を行っている。遺跡は平成16年に行った発掘調査で弥生時代～中世の集落跡であることが知られていたが、今回の調査で掘立柱建物7棟、井戸1基のほか土坑、溝等を検出した。建物の1棟は古代、5棟は中世である。2か年の調査の結果、古墳時代、古代、中世の各時期の集落跡の変遷が明らかとなっている。野々市町三日市A遺跡は弥生時代～中世の集落跡で中世に大きく発展した遺跡である。今年度の調査区は狭く、区画溝などの一部を押さえたにとどまるが、明年度以降の調査成果が期待されるところである。

小松市大川遺跡は、梯川に接し小松市街の北の玄関口にあたる江戸時代の遺跡で、昨年度からの継続調査を実施した。梯川に繋がる堀跡及び橋台、北国街道の路盤などが非常に良い状態で検出された。路盤は3面確認されたが、下の2面は粘土の上に砂を固く叩き締め玉砂利を敷いた立派な構造で、第2面は加賀藩三代藩主前田利常が隠居して小松城に入城した寛永17年（1640）以降の城下町が精力的に整備された時期の遺構として注目された。加賀市水田丸遺跡は中世の集落跡であった。狭い調査区であったが複数の掘立柱建物や井戸跡が検出されており、整理・報告は19年度の調査成果とあわせてまとめることになろう。

現地説明会は、大川遺跡や七尾城跡などで開催し、多くの一般の参加を得た。今回紹介した以外の14件の発掘調査の概要については次号で報告する予定である。

平成18年度上半期発掘調査遺跡の位置図



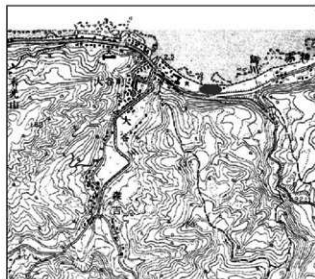
調査担当課	関係機関	事業名	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)
調査1課	国土交通省	金沢河川国道事務所 一般国道470号 能越自動車道建設	七尾城跡	七尾市古城町地	7,300
	土木部	金沢河川国道事務所 一般国道159号改築(七尾バイパス)	古府・国分遺跡	七尾市国分町	7,500
調査2課	国土交通省	金沢河川国道事務所 一般国道8号改築(国分寺地区)	古府・国分遺跡	七尾市国分町	800
	農林水産部	金沢河川国道事務所 一般国道8号改築(南郷広編)	柳取花房骨跡	加賀市柳取町	1,800
		金沢河川国道事務所 柳川河川改修	白江稀川遺跡	小松市白江町	2,090
		中山間地域対策課 中山間地域対策総合整備 三崎	栗津小学校遺跡	珠洲市三崎町栗津	1,330
		農業基盤整備課 船宮12場整備 北大海	正友じんとくじま遺跡	宝達志本町正友	1,000
		農業基盤整備課 船宮12場整備 島原西部	大槻アヅノ遺跡地3遺跡	中能登町大槻	1,150
		農業基盤整備課 船宮12場整備 立立第2	宿神社前遺跡	珠洲市立立町春日野	420
		農業基盤整備課 船宮12場整備 野々江	野々江本江寺遺跡	珠洲市野々江町	730
		道路建設課 一般国道305号 道路改良 海領幹線	横田・寺中遺跡地2遺跡	金沢市横田西	7,000
	調査3課	土木部	道路建設課 一般国道249号 国道改築	大谷中学校東遺跡	珠洲市馬蔵町
道路建設課 主要地方道 内浦柳田線 珠洲道路		五郎左エ門分遺跡	能登町五郎左エ門分	700	
道路建設課 一般国道415号 国道改築		太田A遺跡	羽咋市太田町	3,630	
都市計画課 都市計画道路 根上小松線		大川遺跡	小松市大川町	900	
河川課 広域基幹河川改修 安原川		三日市A遺跡	野々市町三日市	1,500	
調査4課	土木部	道路建設課 主要地方道 高松津幡線 河北断道道路	加茂遺跡	津幡町加茂	3,970
	道路建設課 主要地方道 松任子ノ丸線 海領幹線	中新保遺跡	白山市中新保町	2,500	
	都市計画課 都市計画道路全長橋本線 一般国道305号改築	徳丸ジョウジャ遺跡	白山市徳丸町	2,800	
	国立病院機構	ダイヤ橋改修整備	栗田C遺跡	金沢市栗田町	650
総計	30件		25遺跡		48,500

平成18年度調査計画(当初)

おおたにもうがっこうがし
大谷中学校東遺跡

所在地 珠洲市馬繰町地内
調査面積 1.150㎡

調査期間 平成18年5月10日～同年7月24日
調査担当 土屋宣雄 宮川勝次



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・古墳時代後期から古代にかけての製塩遺跡である。
- ・複数の遺構面を確認し、製塩炉や土坑、溝、小穴等を検出し、多量の製塩土器と共に土師器や須恵器が出土した。
- ・古代では、丘陵側からの流水を遮断し排水を目的とした溝等を確認した。
- ・粘土による整地面を確認し、揚浜式の塩田面としての可能性がある。

大谷中学校東遺跡は、珠洲市馬繰町地内の日本海に面した海岸段丘に立地し、背後には宝立山が位置する。

今回は、一般国道249号（大谷道路）改築工事を原因として発掘調査を実施し、古墳時代後期から古代にかけての製塩関連遺構と遺物が確認された。

調査の結果、複数の遺構面が確認され、製塩炉や土坑、溝、小穴等を検出し、多量の製塩土器とともに土師器や須恵器が出土した。

特に古代では、調査区ほぼ中央の東西約15m・南北5m以上の範囲で、丘陵側からの流水を遮断し排水を目的とした溝が走り、さらに海側（北側）に開口部を持つ東西2.4m・南北2.4m以上のコの字状の溝内に製塩炉が存在したものと想定される。製塩炉は、明確に確認されたものは僅かだったが、楕円形ないし略方形を呈する土坑状のものと、それらが連続して構築されたため溝状に捉えられるものがあり、炉材の一部として被熱した礫や粘土塊が確認された。

また、時期の特定は難しいが、灰白色粘土による整地土が丘陵に向かってやや斜めに広がり、土器製塩に伴う炉跡や焼土ブロック等の痕跡が認められないこと等から、揚浜式の塩田面としての可能性が考えられ注目される。

(土屋宣雄)



調査区全景（南上空から）



遺構検出状況



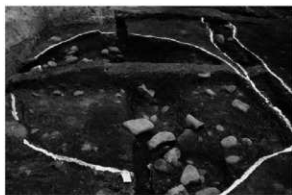
古代の遺構面（上方が海側）



製塩炉検出状況



作業状況



製塩炉完掘状況



整地層断面（塩田面）

やどじんぐま
宿神社前遺跡

所在地 珠洲市宝立町春日野地内
調査面積 420㎡

調査期間 平成18年5月10日～同年6月12日
調査担当 立原秀明 谷内明夫



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/4,000)

調査成果の要点

- ・本調査は県営ほ場整備事業宝立第2地区に係る発掘調査である。
- ・本遺跡は宝立山系の丘陵地と内浦海岸に挟まれた沖積平野を流れる磐若川右岸の水田中に立地する。
- ・弥生～古墳時代と中世の集落跡を確認し、土坑、溝、柱穴を検出した。
- ・縄文土器、弥生土器、土師器、珠洲焼、石器、木器が出土した。
- ・磐若川周辺と宿神社周辺で時期の異なる遺構のまとまりを確認した。

調査区は3箇所に分かれ、便宜的にA～C区と呼称した。地山は砂質土が主体である。

A区は磐若川沿いに位置する。弥生時代後期～古墳時代前期の土坑、溝、柱穴を検出した。北西端部で磐若川へと低くなる砂礫層を確認した。南端部で南へと徐々に低くなる落ち込みを検出しており、付近の地山は粘質土であった。中央部で遺構の分布が目立つ。

B区は東西に長い調査区で、現集落の北東部に位置する。中世の土坑、溝、柱穴を検出した。東半部は東へと徐々に低くなる落ち込みで、地山は粘質土であり、A区で検出した落ち込みとつながる可能性がある。中央部で遺構の分布が目立ち、西端部は少ない。

C区は現集落の北西部に隣接する。中世の土坑、溝、柱穴を検出した。北端部で北へ徐々に低くなる落ち込みを検出し、地山は粘質土であった。西端部では西へ徐々に低くなる落ち込みを検出した。中央部で調査区と併走する溝を確認した。珠洲焼の他に縄文土器が数点出土している。

調査の結果、磐若川周辺と宿神社周辺で遺構のまとまりを確認し、出土遺物は北から南へと新しくなる傾向が窺えた。中世以降の集落跡は宿神社周辺の現集落と位置的に重なるものと考えられる。地山が粘質土の箇所は地形的に低くなっており、往時の集落は砂質土の微高地上を選地して営まれていた可能性が高い。

(谷内明夫)



遺跡遠景 (北東から)



A区①完掘状況 (南東から)



A区②完掘状況 (北から)



B区①完掘状況 (北西から)



B区②完掘状況 (西から)



C区①完掘状況 (北から)



C区②完掘状況 (南西から)



C区③完掘状況 (東から)

まさとも 正友じんとくじま遺跡

所在地 羽咋郡宝達志水町正友・紺屋町地内
調査面積 1,000㎡

調査期間 平成18年5月10日～同年7月20日
調査担当 松山和彦 森山佳



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・本遺跡は、前田川によって形成された扇状地の扇端部北端に位置する。
- ・古墳時代～中世の掘立柱建物・井戸・溝・土坑等を検出した。
- ・土師器・須恵器・珠洲焼・陶磁器・銅銭が出土した。

本調査は、県営ほ場整備事業北大海地区に係る発掘調査である。平成16年度にも調査が行われ、弥生時代から中世の遺構・遺物が確認されている。今年度は遺跡の北東部、平成16年度調査で古代の

遺構・遺物が確認された地区の北側で調査を行った。

調査の結果、調査区中央部を中心に掘立柱建物7棟、井戸1基、土坑5基、溝6条、小穴多数を検出した。掘立柱建物7棟のうち、1棟は古代の3間×2間の総柱の掘立柱建物で、調査区中央部のやや西側で検出した。それより東の地区からは、中世の掘立柱建物5棟を検出した。全て2間×2間程度の規模で、うち2棟は建て替えを行っていることが確認された。ともに北東に位置する柱穴から土師器の小皿が出土している。その他、古代～中世の井戸・溝等を検出した。溝のなかには、掘立柱建物と軸を揃えているものもあり、区画溝と考えられる。また中央部西側からは、古墳時代の土坑等も検出している。遺物は古代の土師器・須恵器を中心に、古墳時代の土師器、中世の土器・珠洲焼、近世の陶磁器等が出土し、柱根など木製品や宋銭も若干出土している。

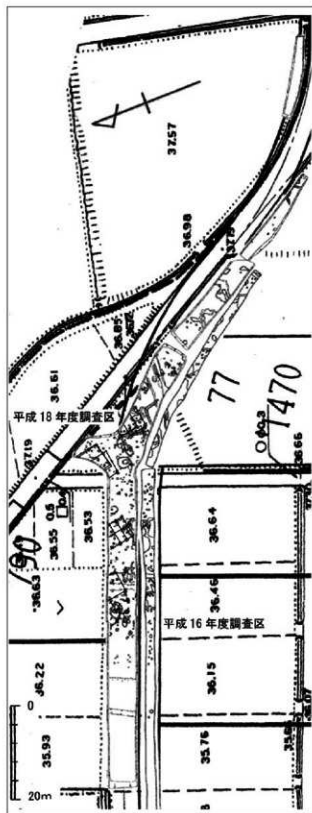
今年度調査では、古代の遺構・遺物が調査区中央部の西側を中心に分布し、古墳時代は中央部西側のみに、中世は中央部東側以東に分布している状況が確認できた。古墳時代から古代にかけて集落域が東に広がり、中世には集落自体が東へ移っていったと考えられる。(森)



調査区近景 (西から)



調査区近景 (北から)



調査区位置図 (S=1/8000)



遺構検出状況 (総柱の掘立柱建物)



遺物出土状況 (掘立柱建物の柱穴)



遺物出土状況 (古墳時代の土坑)

あつかい
三日市A遺跡

所在地 石川郡野々市町三日市町地内
調査面積 480㎡

調査期間 平成18年8月3日～同年9月4日
調査担当 宮川勝次 大路菓子



遺跡位置図 (S=1/25,000)



南調査区 完掘状況 (南東から)



北調査区 完掘状況 (西から)

調査は二級河川安原川広域基幹河川改修事業を原因とし、調査区を便宜上、既存仮設道路を境に北調査区、南調査区に分けて実施しており、弥生時代～中世の遺構・遺物を確認した。その中心は中世であり、溝3条、掘立柱建物1棟を確認した。溝は両調査区で確認でき、共に区画溝の可能性が高く、過去の調査成果から一連のものである可能性がある。

南調査区の溝は、幅約1.5m、深さ約0.5mでほぼ南北方向に走り、遺物は土師器片が少量出土した。北調査区では2条の溝を検出し、そのうちの一つは、幅約1.8m、深さ約0.7mで、北東・南西方向に走り、再掘削の後、調査区西部で北折する。遺物は珠洲焼底部、土師器皿、鉄滓などが出土しており、溝に伴う可能性がある掘立柱建物を1棟、溝の北側で確認した。

弥生時代の遺構は明確なものも確認しておらず、包含層などから該期後半の土器片が数点出土したにとどまる。また、中世溝に切られる畝溝も数条確認しているが詳細時期は不明である。

本調査区に隣接して野々市町教育委員会が継続的に調査を実施しており、それらの成果もふまえて、遺跡の性格付けが期待される。

(宮川勝次)

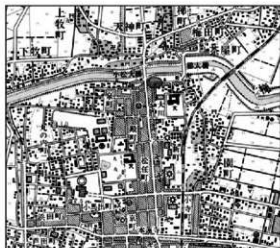


北調査区 中世溝と掘立柱建物 (東から)

大川遺跡

所在地 小松市大川町地内
調査面積 1,700㎡

調査期間 平成18年5月15日～同年8月23日
調査担当 澤辺利明 山田由布子 大路葉子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査区域は近世小松城下町の北の玄関口にあたる。緊急街路整備(都)根上小松線に係る発掘調査は昨年度から続くもので、昨年度は17世紀中頃にはじまる町屋跡を検出している。今年度の調査でも一部町屋城がかかるものの、宅地により攪乱され遺存状態は良くなかった。検出遺構の主体は、近世の北国街道、城下町にめぐらされていた堀とこれに伴う石垣等である。

調査区西半部では後世に厚く盛土がなされていた事から遺構の遺存が良く、3面の遺構面を確認した。最下の第3面では幅約10mの大溝や道路とみられる硬化面を、第2面では、第3面上に粘土、砂を盛り50～60cmかさ上げた上に玉砂利を敷きつめた道路を、最上の第1面では砂を版築し10～30cmかさ上げた上に、同じく玉砂利を敷いた道路を確認した。道路幅は36m以上、道路縁に沿って浅くやや不整形の備溝をとまなう。東半部では第3面は確認されず、第1面は上下水道工事や宅地等により大幅に削平されていた。遺存したのは第2面の一部のみで、玉砂利敷き道路を確認した。検出した道路は調査区中央部やや東よりで堀にかかる。堀は幅132m、兩岸には凝灰岩切石を4～5段重ねた高さ約25mの石垣(石垣1・3)が築かれていた。昨年度調査でも堀西岸で石垣を確認しており堀沿いに護岸石垣が築かれたとみられるが、今回検出の石垣は石材規模も大きく、ここに架かっていた橋の橋台を兼ねたと思われる。石垣には積み直しが認められる。また、堀内部には橋脚が3本遺存した。後世の堀縮小等に際し上部を切り欠き下半を残したものとみられ、直径35～40cmの丸太材であり、残存長170～250cmを測る。さらに石垣1に直行して、この堀をさえぎるように築かれた石垣(石垣2)が確認された。その外側からは、天保通宝、文久永宝などの貨幣や19世紀代を主体とする多量の陶磁器が、石垣下からは再興九谷窯の一つである若杉窯の鉢片が出土しており、石垣2は幕末段階に行われた堀幅縮小時に築かれたものと思われる。また、石垣2の用材が多様な形状や色合いをなすことから、単に護岸のみならず、梯川と町中を結ぶ舟運の要であった本堀の入り口として、修景を図った事も推測される。



遺跡遠景(東から)

さて、道路は梯川沿いを走る市道下で確認したものである。堀については縮小され町中の排水路と化していたが、小橋川として舟の出入りを記憶する古老もみえた。小松市街は近世城下町の地割を比較的良く残しているが、これら遺構はそれぞれ、承応元年(1652)の『加州小松城之図』をはじめ、小松城下を描いた各絵図に認められる北国街道、梯川と九竜橋川を結ぶ堀

にあたりとみてよからう。また、橋については、天和三年(1683)の『小松町家数・寺社等書上』記載「小松町橋六つ」中の「かけはし小橋」に比定され、絵図に「小バシ」と記載されるものにあたろう。寛文11年(1671)の『小松町公儀御普請橋書上』には「一、長八間七尺、幅七間五尺五寸 梯小橋」とあり、確認した堀幅に大過ない数字が記載されている。

これら道路、堀、石垣等の構築時期について、堀内からは17世紀中頃以降の陶磁器が多量に出土するもの、道路面からの出土は極僅かである。周辺資料も含め今後さらに検討を要するが、昨年度の調査結果や、第1面の大溝から17世紀第2四半期頃の遺物が出土していること、隠居した加賀藩3代藩主前田利常が小松城に入城した寛永17(1640)年以降、大規模に小松城や城下町の整備が行われていることなどからみて、最初に玉砂利敷き道路となる第2面については、17世紀中頃の造成と考えておきたい。その後小規模な改修を重ねながら、ある時期、第1面道路にいたる大規模なかさ上げ工事が行われたのであろう。

(澤辺利明)



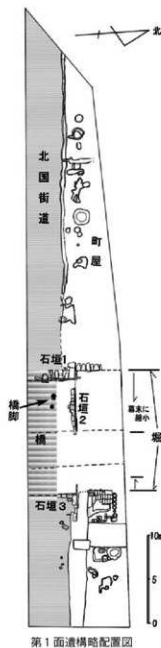
第2面道路近景(西から)



道路断面(北西から)



石垣1・2(北から)



第1面遺構略配置図

みずたまる
水田丸遺跡

所在地 加賀市水田丸町地内
調査面積 300㎡

調査期間 平成18年9月7日～同年10月5日
調査担当 澤辺利明 大路葉子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

水田丸遺跡は、加賀市東部を流れる動橋川左岸の河岸段丘上に立地し、遺跡の北方には縄文時代後・晩期の横北遺跡や、国指定史跡法皇山横穴古墳が存在する。

本調査は主要地方道山中伊切線緊急地方道路整備事業に伴うもので、6月の試掘調査で発見された遺跡である。

試掘調査では、古墳時代の遺物が出土し、当該期の遺跡が分布することが予想されたが、遺跡を覆う厚さ約1mの砂礫層の下からは、掘立柱建物（2間以上×2間以上が1棟、廂を持つと思われる建物2棟）や、素掘り井戸1基、土坑などが検出され、土師器皿や越前焼播鉢、加賀焼甕、天目茶碗、行火など、室町～戦国時代にかけての遺物が出土した。

これらことから、今年度調査区域は、中世後期の集落域にあたる想定される。

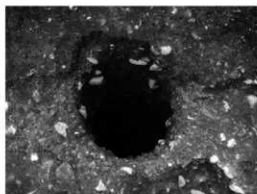
(大路葉子)



調査区発掘状況 (南東から)



発掘作業風景



井戸発掘状況



小学生発掘体験の様子

平成18年度上半期の遺物整理作業

第1班

上半期は、二ツ梨グミノキバラ遺跡（小松市、平成17年度調査）の記名・分類・接合作業から始まった。出土した須恵器を選別しているとかくさんの壺や瓶の破片の他に、あまり見たことの無い須恵器の破片があった。底部の近くで内屈し、口縁部へ直立気味に立ち上がる器形は、お皿に移したプリンのような形で、大きさも様々だ。聞くと、貯蔵具専用の焼台で、平底の貯蔵具の下に置いたり、高台の内側に差し込んだりして使用したそうだ。内屈した部分に気を付けながら実測を終え、遺構図トレースまでの作業を終えた。



第1班 焼台の接合

続いて、瀬戸町遺跡（かほく市、平成17年度調査）の記名・分類・接合作業から遺構図トレースまで作業を終えてから、洲衛窯跡東支群（輪島市、平成4年度調査）の整理作業に入った。取蔵庫へ遺物を取りに行くと、やたらと重いパンケースが多くあり、中を見ると須恵器片の溶着した粘土塊がゴロゴロと入っている。「これ接合？」「そう接合」、どこが割れ口なのかも判らない粘土塊を見ると、指頭痕がはっきりついている。「焼台だ」須恵器が動かないように底部に押し込んだのだろう。粘土の塊の上に粘土を重ねたものもあった。小松市の二ツ梨グミノキバラ遺跡と輪島市の洲衛窯跡東支群、全く形の異なる2種類の焼台は、私に「窯について勉強なさいよ」と言っているようだった。（北 寿栄）

第2班

小島西遺跡（七尾市、平成14～16年度調査）のA～C区とG・F区出土の土器248箱の記名・分類・接合作業を行った。小島西遺跡については、昨年度も担当したことだから遺跡の概要は知っていたが、今回の調査区からは、中世の遺物が多く出土していた。



第2班 土器の接合

特に、G区の溝からは、中世の土師皿が多量に出土していた。完形の物もかなりあったが、色調、形状が酷似している土師皿の破片の接合は困難を要した。昨年度と比較しても、古墳～平安時代の製塩土器の出土量が、やや少ないように思われた。また、戦国～江戸時代の陶磁器類は、ほとんどの区から出土していたが、土師皿の量に比較すると、その点数は非常に少なかった。班員5名という少人数で、しかも短期間に248箱もの記名・分類・接合作業を行うことは、困難を極めた。発掘調査の担当者と密な連絡をとり、そのうえでの適切な指示が、迅速かつ正確な整理作業につながることを改めて考えさせられた。（黒田和子）

第3班

大川遺跡（小松市、平成15年度調査）、金沢城跡（金沢市、平成16年度調査）の記名・分類・接合作業および、実測・トレースの作業を行った。

大川遺跡は度重なる水害により「泥町」と呼ばれていた地域にある集落遺跡であった。そのため、土器などの接合には、あまり期待ができないだろうと感じていたが、土師皿の残存度も高く、数多くの出土には驚かされた。土師皿は、一つとして同じ物は無く、作り方の違いや焼き方の違いから、作り手や生産地など、職人に関わることを勝手に想像しながら実測を楽しんだ。

金沢城跡の整理は、整理課で長く仕事をしていると、大抵の方が関わったことのある仕事である。ところが、私には今まで縁がなく、知識だけが届けられて実際に触れることのなかった遺跡によりやく取り組むことのできる機会が来た。待ちに待った機会とは言え、あの瓦礫の山の中に2、3日も居れば、手もボロボロになり、瓦の重いパンケースを幾度となく上げ下ろしするうちに、腰痛の出てくる方や、腕が上がらない方など、自分達の体が故障していくのに気づいた。整理作業で必要な、「やる気」、「根気」に足して、不可欠なのが「体力」だと言うことを痛感させられた。

これら金沢城跡の出土品整理に関わる方たちへのアドバイスとして、体力づくりを勧めたい。こう言いながら、自分が、この仕事に関わることでできた貴重な時間大変感謝している。(本保早苗)

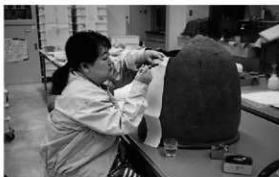


第3班 瓦の接合

第4班

上半期では国分尼塚遺跡(七尾市、平成17年度調査)、下福増遺跡(金沢市、平成17年度調査)、小島西遺跡(七尾市、平成14~16年度調査)、米浜遺跡(志賀町、平成17年度調査)、飯田町遺跡(珠洲市、平成16・17年度調査)の出土品整理作業を行った。

米浜遺跡では、製塩土器の細片が大量に出土していたことから、その接合作業は難しく、なかなか完形の製塩土器にはならなかった。また、今期の整理作業で印象として残っているのは、飯田町遺跡の出土品である。



第4班

遺物の数量は少なかったものの、珠洲焼の大甕が2点、他にも珠洲焼製品の破片が多数出土していた。中には大きく歪んでいる容器や、すり鉢が溶着した破片もあり、それらを正確に実測するのは大変だった。特に珠洲焼の大甕は、2点とも井戸側として利用されたためか、完形に近い製品であったが、底部が見つからず残念であった。さらに初めて見る遺物に刻印のある土鍾も出土していた。この珠洲焼の土鍾と大甕の実測を担当できたので、貴重な体験をしたと思う。(中村静絵)

第5班

上半期においては、まず整理期間の短い花園上田遺跡(七尾市、平成17年度調査)の整理作業を終えてから、八幡遺跡(小松市、平成4~6年度調査分)に入った。八幡遺跡では、始めに300箱もの近世陶磁器の分類・接合作業を行い、その後追加分として、瓦類など160箱の分類・接合の整理作業となった。これらは八幡遺跡の一角で発掘された近世の窯跡で焼かれたものであるために、サヤ・トチン・輪ドチ等の窯道具類が多く見られた。そのため実測した遺物も陶磁器などの製品が、どの様にして焼かれていたか判るような遺物が選ばれた。

皿は軸ハギした重ね焼、碗等はサヤに輪ドチを置き、その上にハマ、そして製品が置かれた焼き方、ハリを使った焼き方など、さまざまな焼き方をしていたことが判った。この遺跡では瓦も焼かれていたため、赤瓦なども多く出土していた。瓦は見た目では、同一個体の見分けが難しく、刻印や瓦当がある瓦を中心に、胎土や割口で判断した。染付、陶磁器、素焼きの瓦などでは、絵柄や釉薬、形状の特徴が同じ物が多くあり、困難を極めた接合作業であった。(中尾望徳)



第5班 「重ね焼」の実測

第6班

上半期は、長竹遺跡(白山市・平成2年度調査)の整理作業に始まり、その後、今年度の整理作業の大半を占めている加茂遺跡(津幡町・平成14年度調査)の出土品整理を行った。

加茂遺跡の出土品には、縄文土器から弥生土器、土師器、須恵器などの土器があり、須恵器の墨書土器には「真継」・「英太」などの文字が多く見られたが、はっきりと判読できないものが多く、赤外線カメラで撮影した写真をにらめっこしながらの実測となった。木器の実測では、大型の柱根や加工部材など、一人では容易に動かせない重量物もあったことから、数人で持ち上げるなど、苦勞の多い作業であった。さらに木器の中には、完形で残っていた簡易水道の溜枳部分があり、その組み立てや実測に悪戦苦闘しながらも、どうにか木器の整理作業を終了することができた。(山口 桂)



第6班 大型木器の実測

第7班

上半期は、小松城跡(小松市、平成16年度調査)、粟津小学校遺跡(珠洲市、平成17年度調査)の整理作業を行い、その後に作業が下半期に継続された飯川谷製鉄遺跡(輪島市、平成17年度調査)の整理へ入った。

粟津小学校遺跡の出土物には、弥生土器、土師器、珠洲焼、陶磁器など、古代から中世の土器がみられ、12~13世紀代では、土師器の椀や皿などの小型の遺物が多く、胎土中には海綿骨針が含まれているものがあった。加えて大型の遺物には、珪藻土の板石を何段も積み上げ、中世の井戸枠として使用された石材や、珠洲焼の大甕があったが、大甕は、口縁部から推定される大きさに対して、出土した破片の量が少なかったため、班員の一人ひとりが、根気とひらめきを要する接合作業だった。



第7班 井戸材の実測

なお、下半期においては、班員構成が変動した関係から、第5班内の作業グループとして飯川谷製鉄遺跡の整理作業を進めた(藤井恵里)

第8班

下町マツチャマ遺跡（七尾市、平成17年度調査）の整理作業を終えてから、大川遺跡（小松市、平成17年度調査）の整理作業を行った。

この大川遺跡とは、近世小松城下町の一部である町屋跡と堀跡からなり、陶磁器を中心に瓦類、石製品、金属製品、木器等が出土していた。町屋跡の区画ごとに出土品の整理を進めていくと、微妙に遺物の構成様相に違いがあり、当時の町屋の「宮み」と「富」の違いを感じながらの分類・接合作業であった。



第8班 鋳型の接合

特に、陶磁器の産地別の分類作業は容易ではなく、17～18世紀の肥前陶磁器を中心としていた中で、大皿も出土している九谷製品の分類と識別には、困難を極めた。また、越前焼の大甕と、脆くなった鉄鍋の鋳型などの接合にも苦戦した。

実測作業においては、総点数が1200点を超える遺物量の中で、染付製品が半数以上を占める内容には、非常に厳しい業務の感があり、いかにソフトに能率アップを図るかを考え合わせた作業であった。

分類と接合、その後の実測など、全てにおいて極めて困難な作業の連続であったが、反面、数多くの陶磁器に触れることで、漳州窯、初期伊万里、九谷、若杉などを同時に比較や観察をできた事は、多くの収穫となった。

大川遺跡の整理作業は年度末までも続くが、その内容は記憶に残る遺跡となるであろう。（馬場正子）

復元班

上半期の土器の復元作業は、越前焼の大甕やすり鉢が目立つ大川遺跡、高坏や長頸壺に特色がある小島西遺跡、陶磁器製品が多い八幡遺跡をはじめ、十数遺跡の約150点の復元等の作業を行った。

遺存の度合いが低い土器は、復元の材料である「石膏」を大量に消費することになり、破片数が多い須恵器や土師器は、破片を一つずつ接合しながら、全体的なかみ合わせを見ながらの仕上げとなる。



復元班 大甕の復元

特に大川遺跡の大甕は意外であった。バラバラになった破片から接合関係を確認した破片群となり、接合しながら石膏を入れて完形した土器（復元品）にするまで、長い作業であった。この甕はこれからどんな時間を過ごすのか。作業をした私には知るよしもない。（小間博文）

洗浄班

平成18年度の上半期では、農林部事業の森ガッコウ遺跡、米浜遺跡、粟津小学校遺跡、国土交通省事業の七尾城跡など、全部で7遺跡の洗浄・乾燥作業を行った。

米浜遺跡は、志賀町の製塩の遺跡であり、細かく割れた土器と焼け石が多く、箱数の割にはかなりの土器片と石を洗浄した。また、七尾城跡の出土品には、「るつば」の他に硯や珪化木など、あまり目にしない遺物があった。洗浄の作業に入る前には、「るつば」はどのような物なのか、また「るつば」の内部には、金が入っている物も有ることから、慎重に洗うように説明を受け、戦国時代の職人達の姿を推測した話などを興味深く聞いたことから、「るつば」がある箱の洗浄作業は慎重に行った。（竹内秋子）

環日本海交流史研究集会の記録

「縄文時代の装身具 ―漆製品、石製品を中心として―

はじめに

所長 谷内尾 晋司

石川県は、日本列島日本海沿岸のほぼ中央部に位置することから、古くから海を媒介とした東西交流の場、結節点としての役割を果たして参りました。また、日本海沿岸各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次いでおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが、大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿岸各地の調査機関の皆様呼びかけ、平成12年度より、「環日本海交流史研究集会」を開催しているところであります。また、平成18年度は、衣装、装身具など「古代の装い」を事業の柱とした各種の講座や体験学習など実施しており、今回は、「縄文時代の装身具」をテーマに開催することといたしました。

縄文時代の装身具は、社会の発展段階に応じた独特な形の製品が次々と現れ、ものとしてだけでなく、文化的情報を含んで流通しております。北陸では、富山県の境A遺跡や新潟県の長者ヶ原遺跡などの翡翠製玉類の生産遺跡が所在し、その製品が列島各地に供給されたことが知られております。また、近年の調査により、北陸から東北・北海道の沿岸地域には、石川県米泉遺跡、新潟県青田遺跡、青森県平野遺跡、北海道カリンバ遺跡など、堅飾や糸玉などの特色ある漆製品を出土する遺跡が広く分布することが確認されつつあります。

こうした状況をふまえ、今回の集会は、日本海側の遺跡で発見されている装身具、特に漆製品・石製品を中心に、出土状況と地域的特色を比較し、地域間交流の在り方を考える場となればと考え、開催いたしました。九州は熊本大学の太坪志子さん、山陰は島根県埋蔵文化財センターの米田克彦さん、北陸は福井県あわら市の木下哲夫さん、当センターの西田昌弘さん、富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所の山本正敏さん、新潟県立歴史博物館の荒川隆史さん、東北は秋田県埋蔵文化財センターの小林 克さん、北海道は函館市教育委員会の阿部千春さん、恵庭市教育委員会の上屋真一さんにお願ひし、各地域の実態や状況についてご報告いただきました。球状耳飾や堅飾をはじめとした各地域における様々な装身具の消長、形態変遷、地域的特色、技術的系譜やその伝播経路など、多岐にわたる問題や課題について討議され、相互理解を深めることが出来たことは大変有意義でありました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。



九州地方の石製装身具 —後晩期の玉類を中心とした石材同一—

大坪 志子（熊本大学埋蔵文化財調査室）

1. はじめに

日本国内でのヒスイ産地発見、さらに蛍光X線分析による新潟産のヒスイの広域分布の判明、これは画期的な発見であったが、逆に調査者には「緑色の石=ヒスイ」という先入観を持たせることにもなった。九州では緑色の石であれば先ずヒスイと言われ、ほか蛇紋岩や緑色片岩なども報告される。こうした報告に基づく玉の生産像は、「東の玉を使った」「九州各地で在地の石も利用する」という漠然としたものである。近年、薬科哲男氏が鹿児島県上加世田遺跡・大坪遺跡で使用された石材が、ヒスイでも蛇紋岩でもないことを明らかにし、諸特徴を総合して結晶片岩様緑色岩と仮称しており、九州と本州で数箇所ずつこの石は確認されている。氏は、未発見のこの石材は恐らく南九州に産出し、この石材を使用して上加世田・大坪遺跡などで玉類を生産し、九州や本州に供給されたという仮説を立てている。今回、九州の玉類の石材を理化学的に同一し正確な情報を得るとともに、薬科氏の仮説を検証するために蛍光X線分析（福岡市埋蔵文化財センター：比佐陽一郎氏）・粉末X線回折（九州大学：上原誠一郎氏）・偏光顕微鏡観察（北九州市立自然史歴史博物館：森康氏）・肉眼観察および実測（熊本大学：小畑弘己・大坪）を行った。対象とした遺跡は後晩期を中心に早期から晩期末まで165遺跡、889点である。

2. 蛍光X線分析の結果

結果① 薬科氏が結晶片岩系緑色岩と仮称する石材は、主に白雲母からなり多量のクロムを含む変成岩の一種であることが判明した。従って「含クロム白雲母岩」と呼称する。

結果② 表1の左は、報告書の記載に基づく玉類の石材の種類と比率、右が今回の分析による石材比である。約2割を占めていたヒスイは実際4%に過ぎないことが判明した。また蛇紋岩、緑色片岩といわれたものも大幅に減少し、玉類の約7割が含クロム白雲母岩であることが判明した。次いで滑石が多く、玉類の石材が含クロム白雲母岩と滑石でほぼ統一されていたことが分かった。

結果③ 表2は時期別の玉類に使用された石材比である。後期後葉に含クロム白雲母岩が急激に増加する。これは、勾玉・管玉・小玉など新出の小型化した玉類の出現と一致、晩期末には碧玉と入れ替わり弥生時代に継続するのが分かる。また、これは色彩に関して緑色への傾倒を端的に示している。

結果④ 図1は九州の変成岩帯と含クロム白雲母製品出土遺跡、図2は製品のみで未製品出土遺跡の分布図である。分析の結果、九州中にはほぼ満遍なく含クロム白雲母製品が分布している、また、中九州の熊本平野北部に遺跡が集中していることが分かる。生産遺跡についても同様であり、中九州熊本に集中していると同時に、各地に点在している。各地域の中核となる遺跡で、玉生産が行われていたといえる。また、変成岩帯との関係上、含クロム白雲母岩の産地は南九州の可能性は低いと考えられる。

おわりに

縄文時代、特に後晩期の玉作りは予想以上に統一性をもって行われていたことが判明した。石材と製品との対応関係の把握が今後の課題である。今回の作業中、熊本では含クロム白雲母岩を「孔雀石」を呼び、一部古老の間ではヒスイや蛇紋岩と区別されていたことを知った。石材同一には最終的に理化学的手法が必要となろうが、先ず石材に共通の認識を持つ、或いは統一して広く見るといことも必要だろうと痛感した。最後に、今回の会では、多くの情報と多くの方々との御縁を頂きました。お世話ございました石川県埋蔵文化財センターの皆様には、文末ながら感謝申し上げます。



図1 各クロム白雲母製品出土遺跡跡分布図

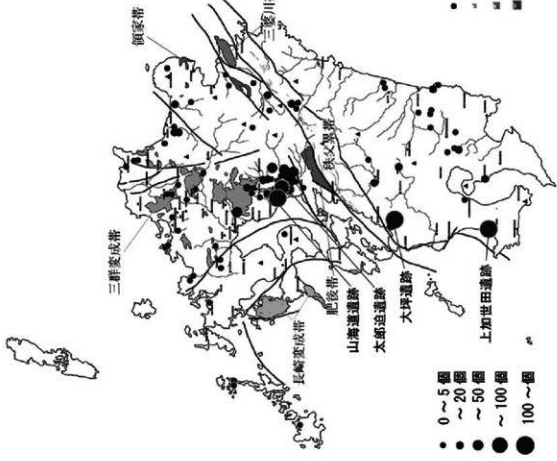


図2 玉製作遺跡跡の分布図

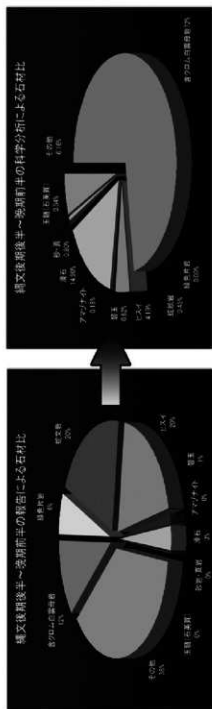


表1 理化学的手法による石材同定結果による石材構成比の変化

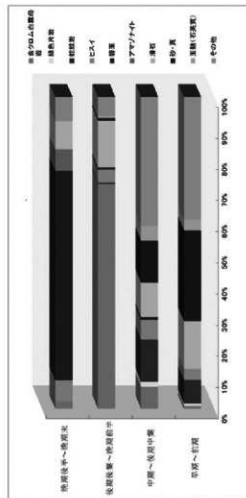
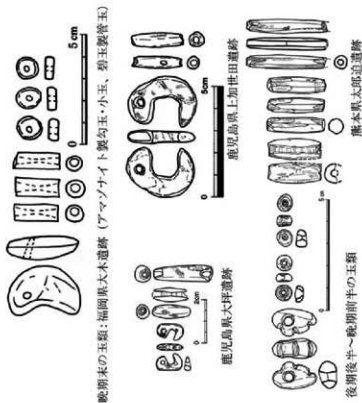


表2 時期別石材比と変化





山陰地方における縄文時代の装身具

米田 克彦（鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

1. 装身具の変遷

山陰地方における装身具の初現は縄文時代早期である。上福万遺跡の軟玉製「蝶形」石製品や日脚遺跡の頁岩製垂玉を見る限り、石材や形態は多様で、定形化された垂飾品はない。

前期になると塊状耳飾が出現し、矩形（A類）と円形（C類）の類型が存在する。石製玉類ではジャスパ製管玉・サメ歯形垂玉、蛇紋岩製「の」字状石製品のように、無彩色の灰色系石材による玉類・石製品が認められる。また貝輪や牙玉のように自然遺物による装身具も現れる。当該期の装身具には貫石や鮮やかな有彩色の素材は使用されず、生活環境に身近な素材を利用していると考えられる。

中期の装身具は鳥遺跡の貝輪のみで、様相が明らかでない。ただ、瀬戸内海沿岸の岡山県津寺遺跡出土の糸魚川産ヒスイ製大珠は、中国地方におけるヒスイ製品の初現に位置づけられることから、当該期に緑色の嗜好性かつ玉材の希少性、硬さの価値観が装身具に付加された可能性がある。

後期は縄文時代を通じて最も装身具の材質・器種が豊富で、装身部位も頭部・耳・首・腕と多様化する。また色調をみると、玉類は緑色、漆製品は赤（朱）色、貝輪は白色を基調とし、最も華やかとなる。石製品ではヒスイ製大珠が衰退し、晩期にかけてヒスイ製丸玉、「結晶片岩様緑色岩」（編者註、大坪氏報告の含クロム白雲母岩）製勾玉・管玉、蛇紋岩製丸玉、滑石製小玉などの玉類が盛行する。塊状耳飾では石包丁形（F類）が認められ、山陰地方に偏在的な分布を示すことから、隠岐諸島を含めて地域性を形成していることが指摘されている（藤田1983）。さらに木製品では漆製品（櫛・耳飾・腕輪）・かんざし、土製品では耳栓・滑車形耳飾、貝製品では貝輪がある。このうち^{ミナト}井手跨遺跡の漆塗櫛は列島内最西端の出土例となる。

晩期には塊状耳飾や耳栓・滑車形耳飾が衰退し、石製品のみ収斂される。石製玉類は後期に続いて緑色系石材（ヒスイ・「結晶片岩様緑色岩」）を指向する傾向が強く、弥生時代に継承される。

2. 石製玉類からみた交流

縄文時代後期中頃から晩期前半の山陰地方を中心に、石製玉類から交流の背景を考える。当該期の石製玉類は攻玉遺跡の分布・様相や石材原産地からみて、ヒスイ製玉類や一部の蛇紋岩製玉類は北陸を中心とする東日本系、「結晶片岩様緑色岩」製玉類は南九州を主体とする九州系に大別できる。

東日本系玉類は井出跨遺跡・水田ノ上遺跡で出土している。鳥根県東部の山間部に位置する神原I遺跡では加曽利BⅠ式、板屋Ⅲ遺跡では安行式土器、下山遺跡では中国地方で唯一となる屈折像土偶が出土しており、鳥根県東部で東日本（東北・関東・北陸地方）との交流がみとれる。

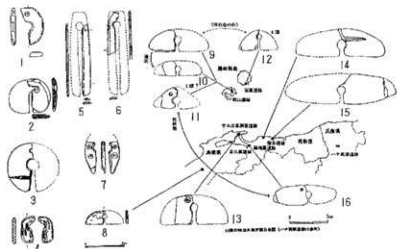
一方、九州系玉類は川平I遺跡・水田ノ上遺跡・ヨレ遺跡・高田遺跡で認められ、特に鳥根県西端部に集中する。この地域は土器の視点から九州との強い結びつきが前期から継続的にあることがしばしば指摘されてきたが、「結晶片岩様緑色岩」製玉類が集中している状況からも同様のことが言及できる。なかでも高田遺跡では「結晶片岩様緑色岩」製玉類やその未成品・剥片が出土しているほか、石器石材は九州の鹿屋産黒曜石を主体としているため、九州からの流通経路のみならず攻玉技術の伝播を考える上でも注目される。また九州系の鐘崎式・西平式土器は鳥取県東部でも出土しており、九州との交流は日本海を介して山陰地方全体にまで及ぶ。以上、当地方では濃密はあるものの、東日本・九州系の玉類のほか、他の遺物が搬入・模倣され、東西の文化が交錯することが確認できた。

【参考文献】 中原 斉 1999「第3章 縄文時代」[新修米子市史]第7巻 資料編考古・原始・古代・中世 米子市
藤田富士夫 1983「縄文～古墳時代の玉製装身具」[季刊考古学]第5号 雄山園
米田克彦 2006「中国地方における縄文時代の石製玉類集成」[玉文化]第3号 日本玉文化研究会



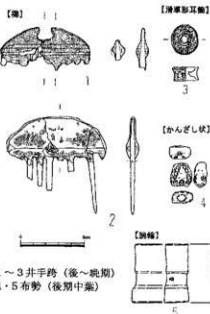
- 1 粟谷遺跡
- 2 布勢遺跡
- 3 山宮笹尾遺跡
- 4 鳥遺跡
- 5 奥小山遺跡
- 6 岩本遺跡
- 7 松尾頭遺跡
- 8 井出跡遺跡
- 9 上福万遺跡
- 10 日久美遺跡
- 11 小糸胡宮遺跡
- 12 崎ヶ鼻遺跡
- 13 佐太講武具塚
- 14 三井Ⅱ遺跡
- 15 垣ノ内遺跡
- 16 川平Ⅰ遺跡
- 17 家の後Ⅱ遺跡
- 18 原田遺跡
- 19 家ノ脇Ⅱ遺跡
- 20 坂田Ⅱ遺跡
- 21 森遺跡
- 22 キタタケ遺跡
- 23 日輝遺跡
- 24 新横原遺跡
- 25 水田ノ上遺跡
- 26 水田ノ上遺跡
- 27 高田遺跡
- 28 岩泉遺跡
- 29 郡山遺跡
- ◎津寺遺跡

山陰地方における縄文時代装身具出土遺跡の分布



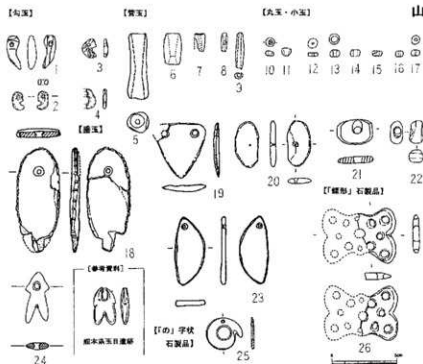
- 1 佐太講武具塚、2 新横原、3 松尾頭、4 垣ノ内、5・6・8 坂田Ⅱ、7・16 日久美、9～11 郡山、12 岩泉、13 崎ヶ鼻、14 集地平、15 岩本 (前期Ⅰ、前期末5・6、中期～晚期Ⅰ、後期中葉～晚期Ⅱ、他は不明)

山陰地方の状状耳飾 (1/5)、F類の分布図 (藤田1983を改変)



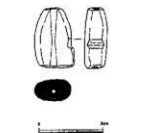
- 1～3 井手跡 (後～晩期)
- 4・5 布勢 (後期中葉)

山陰地方の木製 (漆塗) 装身具 (1/3)



- 1・9・12・13・17ヨレ (後～晩期)、2 川平Ⅰ (後～晩期)、3・4 原田 (晩期)、5・19 日久美 (前期)、6～8・11・14～16 水田ノ上 (後～晩期)、10 井手跡 (不明)、18 日輝 (早期)、20・26 上福万 (20不明・26早期)、21 山宮笹尾 (不明)、22 森 (不明)、23 無 (不明)、24 三井Ⅱ (晩期)、25 奥小山 (不明)

山陰地方の石製玉類 (1/3)

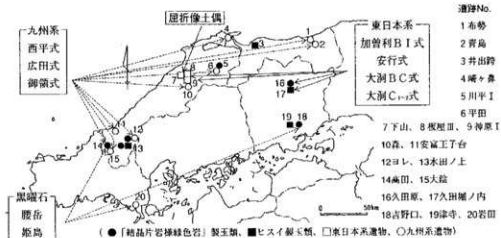


岡山県津寺遺跡出土のヒスイ製大珠 (1/3)

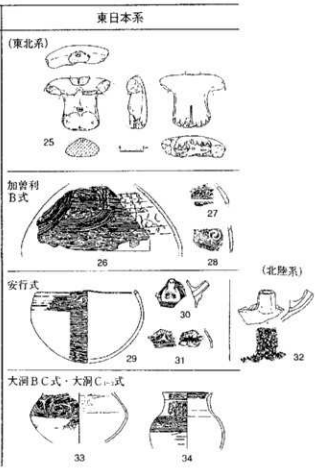
山陰地方における装身具の変遷

装身部位	寶石			非寶石			土		木		木(漆飾)		貝	歯牙		
	勾玉	管玉	丸玉 小玉	珠状 耳飾	「の」 字状	丸玉 小玉	垂玉	垂玉	耳飾	かんざし	飾	耳飾	胸輪	胸輪	数玉	
色調	●	●	●	△	●	△	△	△	□	□	□	■	■	■	▲	□
草創期																
早期																
前期																
中期																
後期																
晩期																

1) 色調は緑色系を●、赤色系を■、白色系を▲、褐色系を□、灰色系を△で表す。(有彩色は黒塗り、無彩色は白抜き)
 2) 時期が不明確な資料は、遺跡の状況から判断し、抜線で示す。



遺物No.
 1～11・18～20大洞、12～17・27森、21～23日レ、24安富王子台、25下山、
 26久田原、28神原I、29・32～34久田原ノ内、30・31板屋I



中国地方における縄文時代後～晩期の東日本・九州系遺物の分布 (遺物: 1/8)



北陸（福井県）における縄文時代の装身具 —漆製品、石製品を中心として—

木下 哲夫（あわら市埋蔵文化財センター）

福井県は北陸の西部に位置し、旧国の越前及び若狭の二国より成る。まず、当該地域に於ける縄文時代の装身具の様相について概観すれば、早・前期の所産である越前の桑野遺跡と若狭の鳥浜貝塚の二者の出土例が突出し、凡そ中期以降については散発的事例の抽出に止まるとの現況にある。

桑野遺跡からは、調査区の中の限定された範囲に密集して分布した多数の土壌中から、略始源期と目される石製塊状耳飾が別種の石製装身具等と組合ったりして多出し、予て別種の石製品は土壌毎に各々区分されて埋納とされた、従来の見解を覆すこととなった。その出土状態は塊状品の対構成が近接して並置乃至重複の状況で検出された例が多く、対品の殆んどは同一の形状・石材を呈している。

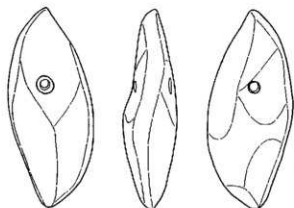
其の内略半数を占める茶褐色の滑石系石材は、形態が比較的均一な様相を示し、その類品を列島中央部等に見るに對し、白色材の品は対構成単位に個体差を保持し、多様性に彼我の類似が予々指摘されるものの、両者が同一遺跡で伴出する例、細身の環状品が列島中央では内国産様の材品を以て存することもまた注視する必要がある。これは、軟玉様を彷彿させる桑野18号品とは対照的事例とされるであろう。翻って、北海道に於ける道南と道東の漆製品分布の関係についても、該地の切目部側位穿孔例も相俟って、極めて示唆的な状況と考えられよう。また、切目部正反の穿孔は「環」の存在とも相俟って該品の使用例に対する疑義へと展開し、彼我に於ける材の同一性もまた指摘出来る。補修孔は精密に穿たれていて、その穿孔技術は何処で如何にして伝置され、用いられる工具はどのようであったろうか。更に、切目部の狭小性は装着法に対する疑義を生じ、二次葬の可能性が言及される因ともなった。端部の作出技法についても、大陸と同様の可能性が述べられたりもする。

視点を鏡状品に転じれば、未だ列島にその類品はなく、彼我の対比が論じられている。然れど相互比較を行うおうとする場合、形態と材の何れの視点を立脚するのが肝要とされるであろうし、渡来・自生の何れの論に組みするかは中々に困難である。所謂環状品や、刺突文を保持する管玉について論じる際もまた同様であり、そこでは原形を保つ例と転用例の峻別こそが鍵とならう。

こうした様相の桑野遺跡に対して、塊状品としては後半期の所産とされる鳥浜貝塚例は、その殆んどが平面円形で断面扁平な品で、略2/3が結晶質石灰岩を材とする。それらの帰属時期は略北白川下層Ⅱ式期に収斂、その枠内で切目長の長大化と中央孔の小型化が時間的変位と看破された。中で後出とされる例や、別種の用途を想定される品には、蛇紋岩・頁岩・玉髓を混じえ、石材の差が工具に関連して、形態差へと連動する可能性が考えられる。他に鳥浜貝塚では、骨角製裝飾品や貝輪も多数出土、ヤブツバキを材として赤色漆を全面に塗布する飾、赤と黒の漆で描き分けられ多くトチノキを用いた盆状の木製容器や土器、桜の樹皮を巻いたり全面に赤色漆を塗った弓なども検出されている。

中期以降の例には、越前に石製大珠が2例ある。高森遺跡の硬玉製品は、不整形の鏢形を呈する大型品であり、桑野例は蛇紋岩系？を用いた先のやや尖った楕円形の鏢形を呈する中型品である。他に後野遺跡の例は、小球の類とされようか。石製垂飾には逆二等辺三角形を呈し、サメ歯模造製品とも位置付けられる例があり、より後出のものとして翡翠製品も散見される。また、土製品には耳栓があり、鼓状・滑車形、有孔・無孔の各態様を示すものの、透かしが施されるような優品は存しない。その他装身具関連遺物の範疇と仮定するならば、一見両頭棒のミニチュア風の石製品、土製の中空棒状品・球状品・柱状有孔品などの品も諸遺跡に散見される。

以上、福井県の状況を概観した。略石製品の現況報告に終始したことを、深くお詫び申し上げます。



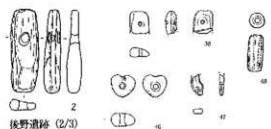
高森遺跡 (1/2)



石製遺跡
右近次郎遺跡 (2/3)

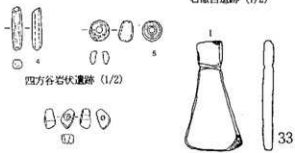


北寺遺跡 (2/3)



後野遺跡 (2/3)

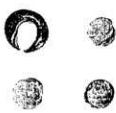
石蔵白遺跡 (1/2)



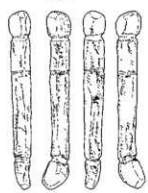
四方谷岩伏遺跡 (1/2)

下永生脇遺跡 (1/2)

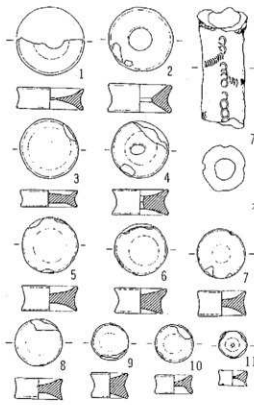
鹿谷本郷遺跡 (1/2)



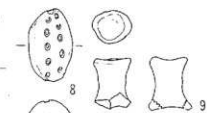
上河北遺跡 (写真)



常安王神の森遺跡 (1/2)



鳴腕手島遺跡 (1/2)



右近次郎遺跡 (1/2)



右近次郎遺跡 (1/2)

右近次郎遺跡 (1/2)

右近次郎遺跡 (1/2)

右近次郎遺跡 (1/2)

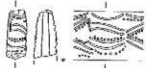
右近次郎遺跡 (1/2)

右近次郎遺跡 (1/2)

右近次郎遺跡 (1/2)

右近次郎遺跡 (1/2)

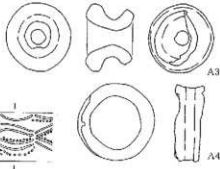
右近次郎遺跡 (1/2)



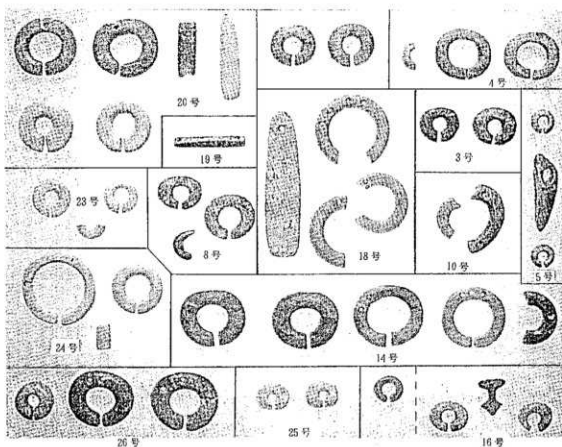
坂井兵庫地区遺跡群 (1/2)



2 四方谷岩伏遺跡 (1/2)










北寺遺跡 (1/2)



桑野遺跡出土の石製品 (約 3/10)

(季刊考古学 89号 2004 年より)

羽鳥下層Ⅱ式			8	結晶質石灰岩
北白川下層Ⅰa式				
北白川下層Ⅰb式			9 14	結晶質石灰岩 結晶質石灰岩
北白川下層Ⅱa式			10	結晶質石灰岩
北白川下層Ⅱb式			12 13 15 16	結晶質石灰岩 結晶質石灰岩
北白川下層Ⅱc式			17 18 19 20	蛇紋岩 頁岩 結晶質石灰岩

鳥浜貝塚出土の伏耳輪の共存土器型式からみた位置づけ

(白川 2002 年より)



石川県における縄文時代の装い

西田 昌弘（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

1. はじめに

石川県では、1993年より「石川県考古資料調査・集成事業」の一環として、縄文時代装身具の集成を実施しており、2000年度までの出土品についてはその成果として「装身具Ⅰ」および「補遺編」にまとめられている。そのため、今回はそれら以降に、新たに確認された資料を追加集めた上で、県内における装身具の変遷と特徴についてみていくこととしたい。

2. 時期別に見た装身具の様相

対象となったのは計65遺跡から出土した総点数458点の出土品である。以上を報告に基づき時期別に分類した上で、各時期の器種組成比較等を行った（第1図、第2表）。

早・前期：装身具を組成する遺跡は、能登17遺跡に対し加賀7遺跡と、能登での出土傾向が強い。特に石製品では球状耳飾の出土点数が突出しており、石製装身具の60.3%を占める。使用石材には粘板岩や流紋岩、ロウ石などがみられる他、出土点数の多い三引遺跡では新潟県糸魚川周辺を産出地とする不純石灰岩が確認されており、早期末～前期初頭という早い段階から、これら地域との交流・交易があったことを窺わせる（第1表）。

中 期：遺跡数は能登10遺跡に対し、加賀11遺跡とほぼ均等化する。草・前期において石製装身具の中心にあった球状耳飾は4遺跡で5点みられる程度と減少する一方で、前段階には認められなかった大珠が6遺跡で12点確認でき、この時期に突出する様相を呈する。また、それに伴って使用石材もヒスイの割合が高くなる傾向が看取された。骨角歯貝製装身具は、この時期に比較的多く、上山田貝塚では貝輪の他、単孔のマガキ製垂飾やカワウソの下顎骨を用いた垂飾が確認されており、製作や使用素材の特徴から北海道～西日本地域との関連性が指摘されている。

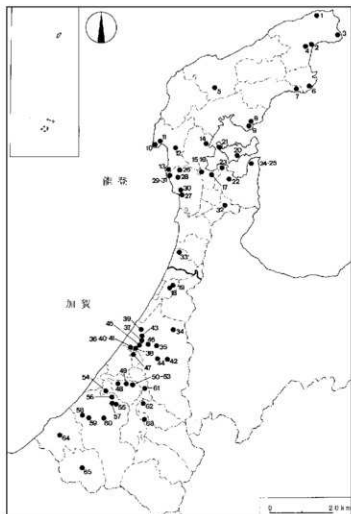
後・晩期：遺跡数は能登6遺跡に対し、加賀12遺跡と加賀での組成率が高くなる。特に金沢市・野々市町周辺において集中する傾向がみとれる。石製装身具における組成の中心は、ヒスイないし硬玉珪質岩製の比較的小型な丸玉等へ移行してくる。土製装身具は後期になると多様化し、加賀での出土数が多い。早期末～前期初頭には三引遺跡における結菌式櫛、中期には真脇遺跡における胸ないし腰飾りと単発的な出土傾向をみせていた漆塗装身具は、後・晩期に至り新保本町チカモリ遺跡や米泉遺跡などで櫛を中心に銅・管玉が組成するなど盛んな使用・製作がみられるようになる。

3. 三引遺跡における石製装身具の製作技法

球状耳飾や円盤状石製品について、出土したの未成品から「平面分割技法」ないし「立方体分割技法」により施溝分割した後、粗磨き、抉り技法による内側円孔部の作製、スリットの切り込み、仕上げ磨き、という製作過程の復元がなされている。また、スリットの切り込み方法については、スリット部に残された円弧状の平行擦痕から糸切技法による切り込みが想定されており、早期末から前期初頭の時期に、すでに石鋸技法と糸切技法の両者が併存していたことが指摘されている。

4. 漆製品の製作技法

三引遺跡出土の結菌式櫛を初源として、後・晩期に至り盛行する漆塗装身具は、近年の科学分析により、前・中期にはベンガラを赤色顔料に用いていたものが、後期には朱が使われ始めるようになり、またベンガラとの使い分けがなされ、多層塗による品質差が生じるようになることや米泉遺跡出土の銅ではクロム漆の使用が想定されるなど、漆製品の多様な塗装工程が解明されてきた。



遺跡番号	所在地	
1	岩戸遺跡	徳島県
2	北方のノリ遺跡	徳島県
3	高松のノリ遺跡	徳島県
4	山形遺跡	徳島県
5	山形遺跡	徳島県
6	新島遺跡	四国県
7	真珠遺跡	松山県
8	甲子遺跡	松山県
9	甲子遺跡	松山県
10	大島遺跡	愛媛県
11	高松のノリ遺跡	愛媛県
12	高松のノリ遺跡	愛媛県
13	高松のノリ遺跡	愛媛県
14	高松のノリ遺跡	愛媛県
15	大島遺跡	愛媛県
16	大島遺跡のノリ遺跡	愛媛県
17	三洲遺跡	愛媛県
18	山形遺跡	山口県
19	山形遺跡	山口県
20	佐賀遺跡	松山県
21	高松のノリ遺跡	松山県
22	高松のノリ遺跡	松山県
23	高松のノリ遺跡	松山県
24	高松のノリ遺跡	松山県
25	高松のノリ遺跡	松山県
26	高松のノリ遺跡	松山県
27	高松のノリ遺跡	松山県
28	高松のノリ遺跡	松山県
29	高松のノリ遺跡	松山県
30	高松のノリ遺跡	松山県
31	高松のノリ遺跡	松山県
32	高松のノリ遺跡	松山県
33	高松のノリ遺跡	松山県
34	高松のノリ遺跡	松山県
35	高松のノリ遺跡	松山県
36	高松のノリ遺跡	松山県
37	高松のノリ遺跡	松山県
38	高松のノリ遺跡	松山県
39	高松のノリ遺跡	松山県
40	高松のノリ遺跡	松山県
41	高松のノリ遺跡	松山県
42	高松のノリ遺跡	松山県
43	高松のノリ遺跡	松山県
44	高松のノリ遺跡	松山県
45	高松のノリ遺跡	松山県
46	高松のノリ遺跡	松山県
47	高松のノリ遺跡	松山県
48	高松のノリ遺跡	松山県
49	高松のノリ遺跡	松山県
50	高松のノリ遺跡	松山県

第1図 石川県縄文時代後身出土遺跡地図 (S=1/200,000)

(なお、遺跡所在地についてはおおよその位置関係が捉えやすいよう、市町村合併以前の行政区画に基づいて論をすすめたことをご了承願いたい。)

【草・前期】

アブライト	滑石	滑石質	滑石石層片岩	含石英粘板岩	頁岩質粘板岩	石灰岩質粘板岩	粘板岩	輝石安山岩	凝灰岩
1	4	1	2	1	2	3	16	1	3
珪岩	珪質岩	結晶石灰岩	石灰岩	粘板岩質石灰岩	含緑泥石不純石灰岩	不純石灰岩	黒曜石	コハク	蛇紋岩
1	1	2	7	6	1	23	2	1	2
真珠岩?	真珠岩?軟玉?	石英	石英質流紋岩	チャート・珪質岩	ヒスイ	メノウ質	流紋岩	流紋岩?軟玉?	軟玉?
1	2	3	2	1	5	1	15	2	1
ろう石	ろう石質	緑泥岩	不明	計					
4	6	2	11	136					

【中期】

滑石	凝灰岩	玉髓	珪質岩	頁岩	蛇紋岩	石英質	石灰岩?	チャート	長石
3	6	1	1	2	3	1	1	1	1
流石	ヒスイ	ヒスイ質	メノウ	流紋岩	流紋岩質	ろう石	ろう石?	不明	計
1	17	1	1	4	1	4	1	6	56

【後期】

滑石	凝灰岩	頁岩	頁岩?	頁岩質	凝結砂岩	砂岩?	中生代砂岩	珪質岩	含硬玉珪質岩
2	3	1	1	2	1	1	5	1	6
ヒスイ	ヒスイ質	メノウ	流紋岩	流紋岩質	蛇紋岩	石灰岩質	チャート	輝緑凝灰岩	粘板岩
13	7	1	1	1	4	1	1	1	1
緑泥岩質	ろう石質	不明	計						
1	5	28	90						

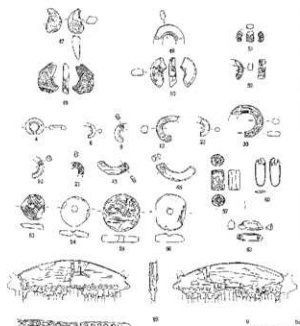
【晚期】

凝灰岩	蛇紋岩	石灰質粘板岩	石灰質岩	含硬玉珪質岩	ヒスイ	ヒスイ質	ろう石?	ろう石質	計
2	2	1	1	7	12	5	1	1	32

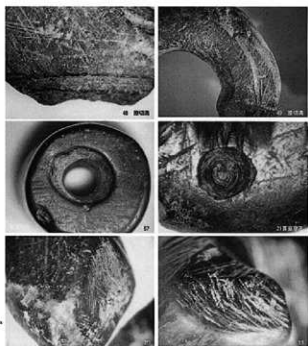
【時期不明】

滑石	凝灰岩	蛇紋岩	蛇紋岩?	ヒスイ	流紋岩	不明	計
1	2	1	1	1	1	7	14

第1表 時期別石材組成表



第2図 三引遺跡出土の装身具 (S=1/4)
 (金山哲哉ほか2004「田鶴浜町三引遺跡Ⅲ(下層編)」
 金山哲哉ほか2005「田鶴浜町三引遺跡Ⅳ」より)



第3図 三引遺跡石製装身具製作技法
 (小嶋芳孝2005「第3期 石製品について」「田鶴浜町三引遺跡Ⅳ」より)

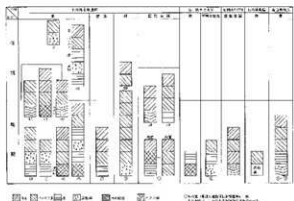


上: 第4図 米泉遺跡出土漆製品

(土器: S=1/12, 他: S=1/4)
 (西野秀和ほか1989「金沢市米泉遺跡」より)

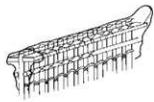
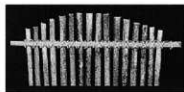
左: 第5図 真跡遺跡出土漆製品 (S=1/4)

(山田芳和ほか1986「石川県能都町真跡遺跡」
 高田秀樹ほか2002「石川県能都町真跡遺跡2002」より)



第6図 漆製品塗装工程模式グラフ

(四柳高孝1995「漆塗装身具の製作技法」
 「石川県考古資料調査・集成事業報告書 装身具Ⅰ」より)



第7図 結筒式復元モデル

(左より) 三引遺跡: 金山哲哉ほか2004「田鶴浜町三引遺跡Ⅲ(下層編)」。
 真跡遺跡: 山田芳和ほか1986「石川県 能都町真跡遺跡」。
 新保本町チカモリ遺跡: 山本直人・榎貝秋津1995「第4期 木製装身具」[石川
 県考古資料調査・集成事業報告書 装身具Ⅰ]より)



富山県における縄文時代石製装身具

山本 正敏（財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）

1. 早期末葉～前期

草創期～早期後葉は、遺跡の発掘例自体が少ないこともあって、石製装身具は確認されていない。早期末葉になって滑石・蛭石製の塊状耳飾や各種垂飾品の、製作と使用が確認できる。上市町極楽寺遺跡が代表的な製作遺跡である。同時期の朝日町明石A遺跡や立山町天林北遺跡などでも塊状耳飾の製作が行われている。初期の塊状耳飾の製作工程は、最初に原石を荒削りし、調整剥離と研磨を加えて円盤状のものを作る。続いて穿孔し、擦切りによって切れ目を入れて完成する。

塊状耳飾は、徐々に形態を変化させながら、前期を通じて作り、使用される。朝日町柳田遺跡は前期後葉の製作遺跡であるが、製作方法は極楽寺遺跡に比べると大きく変化し、円盤状素材への穿孔前あるいは穿孔作業と平行して切れ目を入れる工程となっている。これは切れ目のみ施されている製作初期段階の資料のほかに、穿孔部の上側（切れ目の反対側）にまで切れ目の跡が残っている資料で確認できる。

射水市（旧小杉町）南太閤山I遺跡では指貫型を含む塊状耳飾のほか、前期初頭の異形垂飾品が出土している。石製装身具の種類としては、そのほかに管玉状のものや様々な形態の垂飾品がみられるが、形態分類とその消長の検討は充分なされていない。装身具の中に含まれると考えられるものに、立山町吉峰遺跡、朝日町柳田遺跡などから出土している、有孔磨製石斧（玉斧）がある。薄い磨製石斧状の体部の基部近くに穿孔されるもので、東北地方などにみられるような、先端が二股になるものや靴べら状のものはまだ見つかっていない。

2. 中期

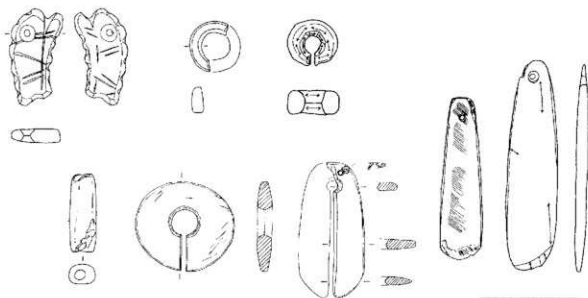
塊状耳飾は朝日町馬場山D・G遺跡などで中期前葉まで残る。また馬場山G遺跡では中期前葉にヒスイ製の玉類を製作し始める。中期中葉以降になると、ヒスイ製の大き珠が出現する。いずれも表採品であるが、氷見市朝日貝塚、富山市北代遺跡、南砺市（旧平村）下梨遺跡などで鏢型の大珠が発見されている。境A遺跡や糸魚川周辺の生産遺跡からもたらされた優品である。

拠点的な集落遺跡では、その他に滑石や蛇紋岩などを用いた各種垂玉類が出土する（立山町二ツ塚遺跡・富山市（旧大沢野町）布尻遺跡など）。勾玉状のものとしては、朝日町下山新遺跡のものが注目される。これは中期の可能性が高い。そのほか、砺波市（旧庄川町）松原遺跡では粘板岩の小扁円盤に穿孔した垂飾品が出土している。

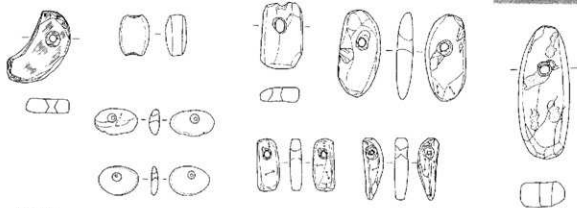
3. 後期・晩期

後期になるとヒスイの大き珠は小型化し、中葉以降は垂玉類、丸玉類などと変わらない大きさになるものと考えられる。垂飾品は様々な形態のものが生み出される。代表的な遺跡として、朝日町境A遺跡や、富山市（旧大沢野町）布尻遺跡、小矢部市桜町遺跡などがある。なかでも境A遺跡は、ヒスイ、蛇紋岩、滑石などを材料に、勾玉・管玉・指輪状・垂玉・丸玉などの各種玉類とともに蛇紋岩製磨製石斧を大量生産し全国各地に流通させている。この遺跡の玉類・磨製石斧生産活動は晩期まで続くと考えられる。

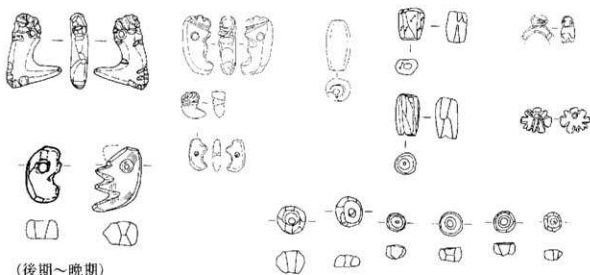
勾玉や丸玉は連珠状にして、首輪や腕輪にしたものであろう。東北や北海道では墓穴から副葬品としてまとめて出土する例が多く見られるが、富山県内ではまだ発見されていない。時間的には晩期に下るものが多いと考えられる。なお後期・晩期における装身具類の分類と時期区分や消長の確認なども、細かな時期比定の難しい資料が多いため、充分とはいえない。



(早期末葉～前期)

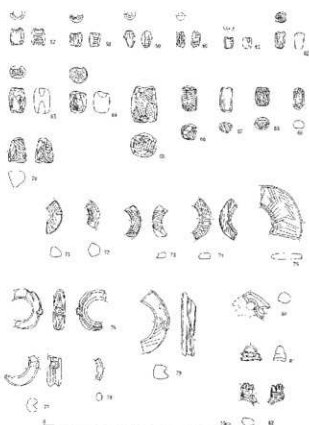
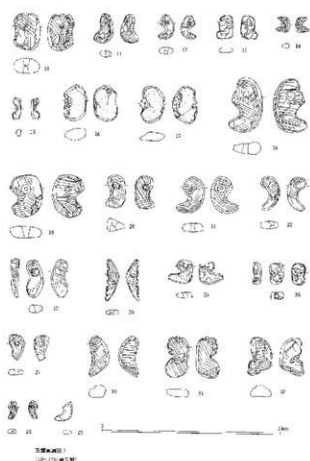


(中期)



(後期～晩期)

第1図 石製装身具の変遷



第2図 境A遺跡の玉類



新潟県における縄文時代の装身具

荒川 隆史（新潟県立歴史博物館）

1. 装身具の出土状況

新潟県内の縄文時代の装身具について、表採品を除き、発掘調査報告書に報告されている遺跡を中心に集めた。その結果、127遺跡で確認でき、点数は1,587点（一部未製品含む）である。内訳は石製823点、土製640点、琥珀製3点、貝製7点、鹿角骨歯牙製12点、漆塗木製102点である。

2. 漆製品

漆製品は8遺跡から出土し、櫛30点・糸製品47点・腕輪15点・耳飾3点・その他の装飾品7点がある。後期では椀部形態がアーチ形のものや台形のもの为主体的で、朝日村元屋敷遺跡のような透かし孔を施すものが認められる。晩期では方形類が主体的で、後葉の新発田市青田遺跡では棟頂部両端に突起が発達するもので占められる。糸製品は前期の長岡市大武遺跡のものが最も古く、カラムシのような繊維芯に生漆とベンガラ漆を塗り重ね、これを2本撚りあわせているとされる。後期前葉の胎内市分谷地A遺跡のものは数本単位の糸を複雑に結んだもので、近接して出土した耳飾と連結していた可能性が指摘されている。青田遺跡では44点の赤漆塗り糸玉が出土している。植物繊維の束2本をZ撚りした糸にベンガラ漆を塗って漆糸を作り、これを15～20本を束ねて結び目をつけたものである。結び目の間隔を置かずに連続させるもの（A類）13点、間隔を空けるもの（B類）4点がある。塗装工程は漆糸の繊維上に直接ベンガラ漆1層を塗るもののほか、漆層上にベンガラ漆3層を塗り重ねているものもある〔四柳2006〕。青田遺跡ではS5～S3期（鳥屋2a式）に比べ、S2～S1期（鳥屋2b式）では集落規模が拡大するものの、赤漆塗り糸玉と腕輪状漆製品は減少しており、縄文時代終末期の様相を示す、あるいは祭祀形態の変化によるもの、などが考えられる。

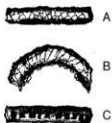
3. 石製品

石製品は、球状耳飾72点、大珠49点、小珠24点、管玉35点、丸玉197点、白玉44点、勾玉29点、垂玉182点、指輪状玉類3点、有孔石製品57点、その他の玉類23点、その他の装飾品21点である。早期末葉から前期初頭の津南町下モ原遺跡では、楕円形で孔部径の大きい球状耳飾と断面エンタシス状の管玉がある。前期後葉の上越市古町B遺跡では、孔部径の小さな正円ないし楕円形の球状耳飾およびその未成品と、断面鼓形の管玉・白玉・垂玉が出土している。前期終末～中期初頭の新潟市南赤坂遺跡では、球状耳飾・「の」字状石製品・玉斧・垂玉が出土し、中期初頭の上越市和泉A遺跡では、縦長の球状耳飾・断面骨状の管玉・翡翠製大珠がある。いずれも各時期の特徴を示している。中期では上越地域で糸魚川市長者ヶ原遺跡などの翡翠製玉類の生産遺跡が数多くある。翡翠製品は信濃川中流域を中心に出土するが〔木島1999〕、大規模遺跡でも大珠や玉類自体が少ない遺跡があり、分布や流通形態を検討する上で注目される。後晩期には大珠などの大形玉類に代わり、丸玉・白玉・勾玉・垂玉などの小形品が増加する。朝日村元屋敷遺跡では213点認められ、その多くが配石墓などの墓坑から出土している。また、不整形に整えた石材や自然礫に2孔を穿つ有孔石製品とも呼ばれるものが目立つようになる。それぞれ形態は異なるものの、孔の間隔はほぼ共通しており、垂玉などの装飾品と考えられる。このほか、阿賀野市六野瀬遺跡、長岡市藤橋遺跡、和泉A遺跡、青田遺跡で細形の管玉が出土しており、注目される。青田遺跡では原産地分析の結果、碧玉製管玉（549）は佐賀県牟田遺跡、丸玉（540）は鹿児島県上加世田遺跡と同グループの可能性が高く、西日本との流通が指摘されている〔薬科2004〕。後晩期の広域的な流通を探るために、翡翠製品以外の産地分析が有効となろう。

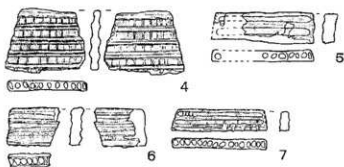
表1 新潟県内の装身具出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	石製	琥珀製	土製	貝製	骨製	木製	遺跡名	所在地	時期	石製	琥珀製	土製	貝製	骨製	木製
アチャ平	朝日村	前～後	6		29				原平	魚沼市	晩	1					
落合向い	朝日村	前・後	1						清水上	魚沼市	早～後	7		4			
下ノリ	朝日村	前～後	1						東倉十文字	十日町市	中	1					
本道平	朝日村	前～後	1						笹山	十日町市	中	3		22			
元屋敷	朝日村	後～晩	248		56		2	10	寿久保	十日町市	前～後	4		1			
道端	荒川町	後～晩						1	野首	十日町市	中～後	4		10			
二軒茶屋	胎内市	前	7		1				森上	十日町市	前～中			2			
分谷地A	胎内市	後						10	洗緯E	津南町	前	2					
青田	新発田市	晩	19		2			67	牛肥原	津南町	中	1					
笹ノ内D地点	新発田市	晩	1		2				下毛原田	津南町	早～前	7					
ニタ子沢A	新発田市	前～中	9		3				道尻	津南町	早～前	1					
ニタ子沢C	新発田市	後			1				道尻手	津南町	前～後	6		13			
村尻	新発田市	後～晩	16		33				道平	津南町	中	2		5			
御井戸	新潟市	後～晩	1					1	道下	津南町	晩			1			
大沢	新潟市	前～中	1		5				大原	塩沢町	早～後			2			
鳥屋	新潟市	晩	3		3				五丁歩	塩沢町	早～後	4		2			
豊原	新潟市	中			8				原	塩沢町	中～後	8		3			
南赤坂	新潟市	前～中	7		1				和泉A	上越市	縄～弥	14	1	6			
ツバタ	阿賀野市	中	2		2				大イナバ	上越市	中～後	3					
藤堂	阿賀野市	後	2		3				大久保	上越市	中			1			
萩野	阿賀野市	中～後			1				大塚	上越市	早～後			2			
横峯B	阿賀野市	中	2		2				藤峰	上越市	後～晩	27		93		1	1
六野瀬	阿賀野市	晩	3						蟹沢	上越市	不明			1			
北野	阿賀野市	前～後	7		8				網ヶ池	上越市	前～晩	1					
長者屋敷	阿賀町	晩			1				黒田古墳群	上越市	前～中	1					
大蔵	五泉市	中			5				額聖寺	上越市	早～晩	3		2			
川船河	田上町	後～晩			1				小丸山	上越市	後～晩	19		113			
保明浦	田上町	晩			2				十二平	上越市	中～後	12					
赤松	三条市	後～晩	1		1				嵐山	上越市	後			1			
上野原	三条市	晩	1						戸々島	上越市	前～晩			2			
長畑	三条市	晩	2						長峰	上越市	中～後	7		4			
長野	三条市	中～後	1		2				平畑	上越市	中～後	1					
八幡平	三条市	後	2						吉町B	上越市	前	15					
藤平A	三条市	縄～弥	2						前原	上越市	早～晩	1					
吉野屋	三条市	中～後			17				松ヶ峯	上越市	早～後	1					
羽黒	見野市	中～後	1						丸山	上越市	前	3					
耳取	見野市	中～晩	1		1				南田	上越市	晩			1			
山崎A	見野市	中	1						峯山B	上越市	前	1					
朝日	長岡市	晩	6						山屋敷 I	上越市	中	11		3			
岩野原	長岡市	中～後	4		1				上ッ平	妙高市	中～晩			1			
牛池	長岡市	後			1				兼保	妙高市	中～後	2					
馬高	長岡市	中	6	1	6				道雄	妙高市	前	2					
上向	長岡市	前	2						松山A	妙高市	中～後	2					
延命寺ヶ原	長岡市	晩	1		1				道彦	妙高市	前～中	1					
山下	長岡市	中～後			1				窪生	妙高市	後～晩	9		70			
三十稲場	長岡市	後	24		1				岩野下	糸魚川市	前～後	2					
外新田	長岡市	中			4				五月沢・C	糸魚川市	早～中	1					
大武	長岡市	前・晩						2	五月沢	糸魚川市	早～前	8					
多賀原敷	長岡市	中～後	3		4				大角地	糸魚川市	前	38					
板倉	長岡市	中			16				長者ヶ原	糸魚川市	中～後	75					
中道	長岡市	中～晩	18		20				寺地	糸魚川市	中～晩	31		3			8
横立	長岡市	後			2			2	中原	糸魚川市	前～中	5					
藤橋	長岡市	晩	24		3				原山	糸魚川市	縄～弥	3					
南原	長岡市	中	1		11				細池	糸魚川市	晩	1					
壺谷洞窟	長岡市	前			1				三屋原B	糸魚川市	前～中	2					
タテ	出雲崎町	中			1				三屋原	糸魚川市	前～中	2					
十三本塚北	柏崎市	後	1		2				八割・杉沢	糸魚川市	前～中	3					
雨池	柏崎市	中	1						長者ヶ平	佐渡市	前～後	3		6			
刈羽大平	柏崎市	後～晩	5						堂の貝塚	佐渡市	中						5
田塚山群	柏崎市	中	1						二反田	佐渡市	縄～弥	3					
小丸山	柏崎市	後	10		1				藤塚貝塚	佐渡市	中	3			7		4
原振坂	柏崎市	中							矢田ヶ瀬	佐渡市	中			1			
城之腰	小千谷市	中～後	11						吉岡惣村裏	佐渡市	前～中	1					
百保東E	小千谷市	早～晩			1												

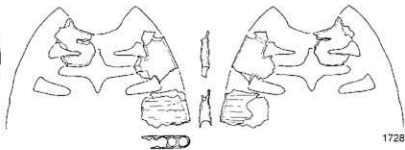
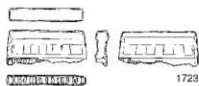
石製装身具には、缺状耳飾・大珠・小珠・管玉・丸玉・白玉・勾玉・垂玉・指輪状玉類・その他の装飾品がある。琥珀製装身具は玉類のみである。土製装身具は、耳栓・缺状耳飾・丸玉・勾玉・垂飾・環状土製品、有孔円筒状土製品、筒輪状土製品、その他の土製装飾品がある。貝製装身具は貝輪・その他の装飾品がある。骨製装身具には鹿角歯牙製を含み、垂飾などがある。木製装身具には、漆塗りの管玉・輪輪・楕・耳栓・その他装飾品がある。



長岡市根立遺跡（後期）



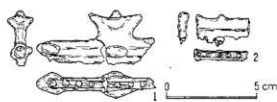
胎内市分谷地 A 遺跡（後期前葉）



朝日村元屋敷遺跡（後・晩期）

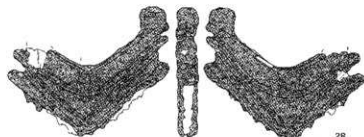


配石遺構出土

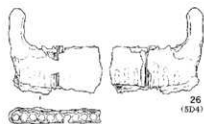


木柱群・組石遺構出土物

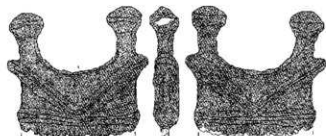
糸魚川市寺地遺跡（晩期）



28
(BFS.VI)



26
(SD4)



29
(19D11,SC1517)

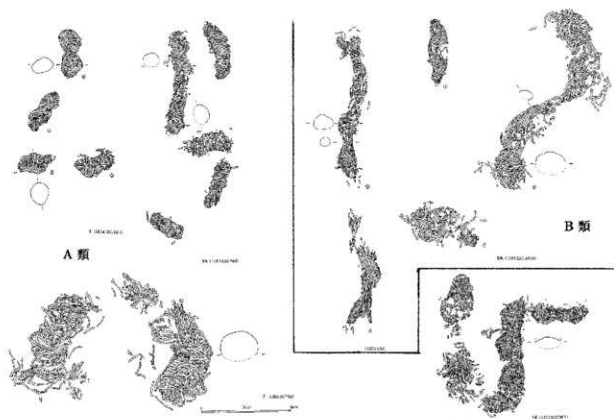


27
(GC4)

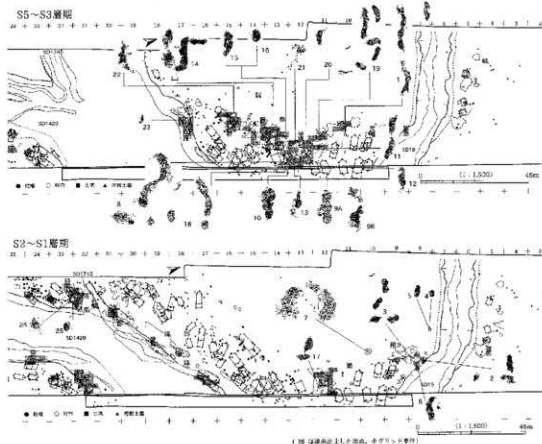
新発田市青田遺跡（晩期後葉）



図1 漆製品① 壺類

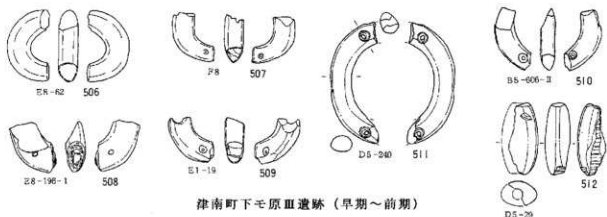


新発田市青田遺跡の赤漆塗リ糸玉（晩期後葉）

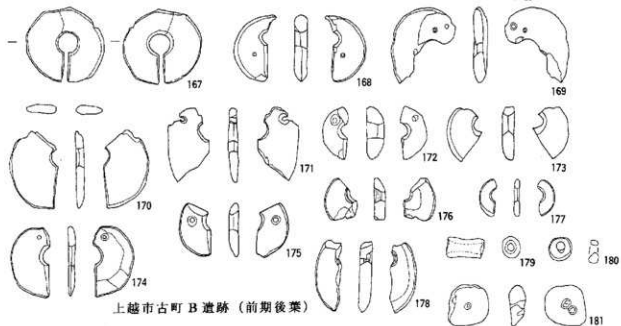


赤漆塗リ糸玉の分布

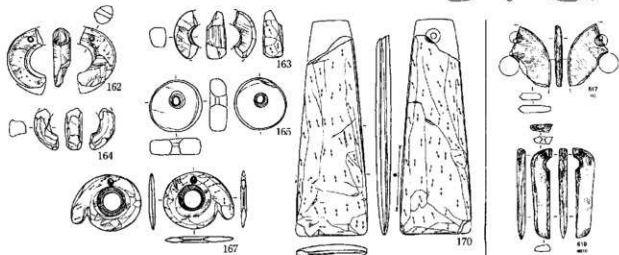
図2 漆製品② 赤漆塗リ糸玉



津南町下毛原Ⅲ遺跡（早期～前期）



上越市古町B遺跡（前期後葉）

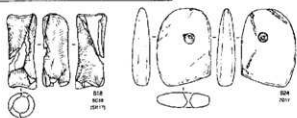


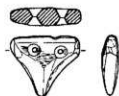
新潟市南赤坂遺跡（前期後葉～中期前葉）

上越市和泉A遺跡（中期前葉）



図3 石製品①

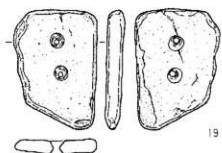




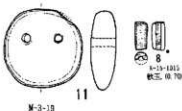
上越市蜘蛛池遺跡（晩期）



朝日村元屋敷遺跡（後・晩期）



長岡市中道遺跡（晩期中葉）



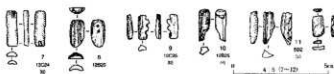
阿賀野市六野瀬遺跡
（晩期後葉）



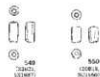
三条市長畑遺跡（晩期後葉）



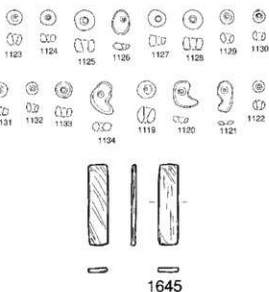
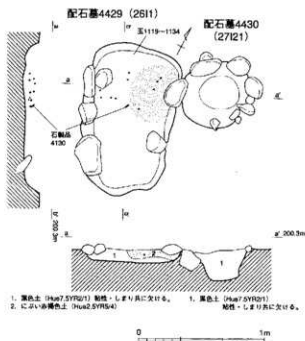
長岡市藤橋遺跡（晩期）



上越市和泉 A 遺跡（晩期後葉～弥生前期）



新発田市青田遺跡の遠隔地石材による玉類



朝日村元屋敷遺跡の配石墓から出土した装身具（後・晩期）

図4 石製品② 後期～晩期



縄文時代の装身具「東北」

—漆製品・石製品を中心として—

小林 克（秋田県埋蔵文化財センター）

漆塗りは木胎だけではなく、さまざまな素材を用いた工芸品に施されるが、縄文時代には繊維製品を胎として漆を施した例がある。近年、日本海側の縄文時代の遺跡、特にその後半の遺跡での出土例が増加する傾向にあるが、その状況を概観したい。

赤漆塗りの繊維製品

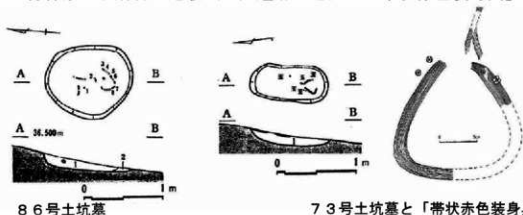
現在のところ、漆が塗られた繊維製品のうち最も古い時期のものは、北海道函館市垣ノ島B遺跡の赤漆を塗った糸で編んだ装飾品である。縄文時代早期貝殻文期の製品で土坑内の埋葬遺体が身につけた衣服に縫い付けられたものと考えられている。その後、前期の例として標津町伊茶仁チシネ第1堅穴群遺跡の土坑墓から出土した首飾り、および腕飾りの繊維製品にも赤漆がかけられている。前期には北海道以外でも繊維製品に赤漆がかけられた例が確認されており、新潟県長岡市大武遺跡では塊状になった赤漆塗りの糸束が出土している。本州側では中期の段階でさらに出土例は広がり、滋賀県栗津湖底遺跡でも赤漆塗りの紐状製品の断片が出土している。

中期までに確認されている赤漆塗りの繊維製品は、基本的に撚り合わせた繊維に漆を塗りそれを束にして装身具としたものであるが、後期に至って装飾品としての形に変化が現れる。北海道小樽市忍路土場遺跡、同余市町安芸遺跡、秋田県北秋田市漆下遺跡、山形県遊佐町小山崎遺跡、新潟県黒川村分谷地遺跡などでは、赤漆塗りを塗った糸を直径数ミリ～10数mmに巻き上げた製品が出土している。地域によってさまざまな巻き上げ方があるが、ボタン状に仕上げた製品は衣服の装飾などに用いられた可能性が高い。後期末から晩期には撚りのかけられていない比較的太い繊維に赤漆をかけ、それを束にした製品が北海道や青森県を中心に見られるようになる。北海道恵庭市カリンバ3遺跡ではこのようにして作られた「腰飾り帯」が、土坑墓内から複数の赤漆塗りの飾り帯とともに出土している。また、青森県六ヶ所村上尾駈（1）遺跡C地区、青森市朝日山（2）遺跡、同平野遺跡では、赤漆塗りの繊維を束にした首飾り状の製品が土坑墓内から出土している。晩期末には阿賀野川を中心として地域で燃った糸に赤漆をかけ、それを束として所々に結び目を作った製品が出土している。新潟県加治川村青田遺跡や福島県三島町荒屋敷遺跡にそうした製品の出土例がある。

晩期の赤漆塗繊維製品と石製小玉

前述の青森県を中心とした晩期の首飾り状繊維製品では、特徴的に石製小玉と併用された例がある。上尾駈（1）遺跡C地区73号土坑墓で出土した「帯状赤色装身具」には緑色凝灰岩製およびヒスイ製の2個ずつの小玉が付けられている。また、青森市平野遺跡でも81号土坑墓出土の「赤色紐状製品」は、緑色凝灰岩製の小玉が組み合わされている。また、朝日山（2）遺跡では、首飾り状の製品が出土したのとは別の土坑墓から石製連珠の首飾りが出土している。これらはいずれも晩期中葉頃の装身具である。石製装身具のうち連珠の首飾りは、北海道内ではカリンバ3遺跡など後期末段階で増加するが、漆塗りの首飾り状の繊維製品もこれにやや遅れて出現し、中葉段階では青森県内を中心にして両者が組み合った装身具として登場するのではないかと考えられる。

青森県六ヶ所村上尾駁（1）遺跡C地区の「帯状赤色装身具」



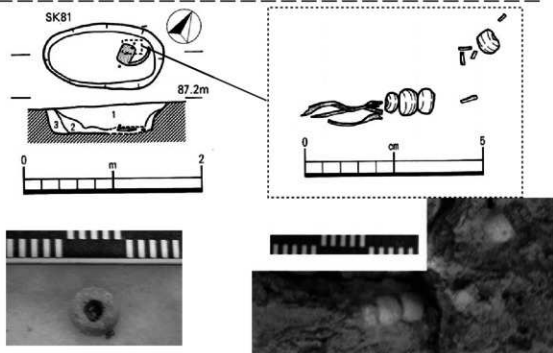
86号土坑墓

73号土坑墓と「帯状赤色装身具」

青森県青森市平野遺跡の赤漆塗り繊維製品と石製小玉



SK09土坑墓と「赤色紐状製品」

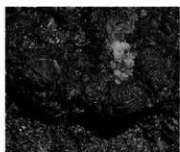


SK81土坑墓と「赤色紐状製品」で繫いだ玉

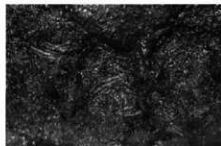
各地の遺産繊維製品・漆糸製品・糸玉



伊予仁志第1窟穴群遺跡漆塗り繊維製品 (報告書より)



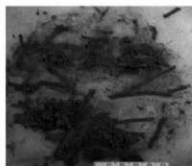
忍路土塚遺跡糸玉 (報告書より)



安芸遺跡糸玉 (報告書より)

漆糸製品・糸玉 (98) 出土遺跡

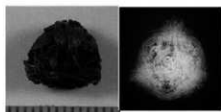
漆塗り繊維製品 (99)



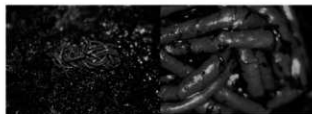
土井1号遺跡漆塗り繊維製品・胸輪 (小林照郎・報告書より)



芦平川遺跡胸輪 (報告書より)



小山崎遺跡糸玉とX線写真 (報告書より)



分谷地遺跡糸玉と部分拡大 (報告書より)



下宅部遺跡漆塗り糸玉片 (図解「水辺と森と縄文人」より)



縄文時代早期の漆系製品

阿部 千春（函館市教育委員会）

はじめに

2001年8月、北海道南茅部町（現函館市）垣ノ島B遺跡の発掘調査において、縄文時代早期所産の土坑墓から赤色の漆様系（以下「漆系」）を加工した編布状の副葬品が出土した。現在のところ、早期の漆系製品は本資料のみであるが、前期前半には新潟県和島村（現長岡市）大武遺跡や北海道標津町伊茶仁チシネ第一堅穴群遺跡などの類例が見られる。また、後期としては富山県小矢部市桜町遺跡や新潟県分谷地A遺跡、福島県三島町荒屋敷遺跡、秋田県北秋田市漆下遺跡、北海道小樽市忍路土場遺跡、晚期には新潟県北蒲原郡加治川村（現新発田市）青田遺跡に見られるなど、漆系の技法は東日本の縄文時代全般を通じて継承されていたものと思われる。

垣ノ島B遺跡の漆系状製品

垣ノ島B遺跡の漆系状製品は、縄文時代早期の所産である土坑墓の坑底において、頭部、肩部、腕部、足部にあたる箇所から出土している。漆系状製品の概要は、幅12mmほどの細い紐状素材を芯材にコイル状に巻いた漆系を加工したものであり、頭部は数本の糸を1組にして髪を束ねるもの、肩部は編布状（約14×12cm）の飾り、腕部は腕輪もしくは袖口の飾りとして使用されていたと考えられる。足部については保存状態が悪く用途は不明である。

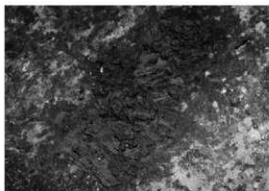
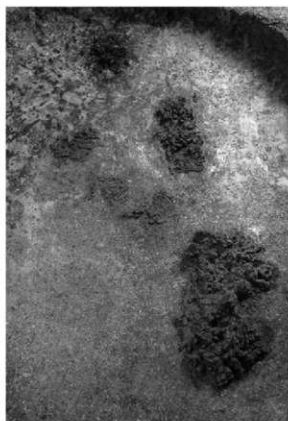
赤色顔料については、国立歴史民俗博物館教授の永嶋正春氏の顕微鏡観察によって、発色の良質なパイプ状ベンガラで、長さが外形の数倍程度という短いものが多いのが特徴であることが確認された。また、劣化が著しい中にも、漆膜状を呈する部分も多く認められることから、漆を使用した蓋然性が高いとした。また、放射性炭素（AMS）による年代測定を行った結果、漆系状製品がつくられた年代は暦年代補正で約7,000BCと測定された。

本漆系状製品については、保存処理後に「発見された日本列島2001」に出展し、その後は整理作業を行っていた調査事務所で保管していたが、2002年12月、事務所の火災により焼損したため、奈良文化財研究所、北海道教育委員会（北海道埋蔵文化財センター）、旧南茅部町の3者による共同研究において、赤外分光分析やX線CR法など多岐にわたる理化学的な分析を行っている。しかし、本資料の解明には多くの課題が残されており、今後も科学的な分析・調査が必要と考えている。

漆系の意義と検討課題

縄文時代における漆系の使用は、まだ類例が少ないため集成するには至らないが、漆製品としての成立が木胎漆器よりも早く初期の段階から見られることから、日本の漆文化を考えるうえで極めて重要な研究テーマであるといえる。

漆系は木胎漆器や藍胎漆器に比べ、芯材に繊維を使用しているため非常に脆弱であり、低湿地などの好条件が揃わない限り遺っていることは難しい。しかし、垣ノ島B遺跡出土の漆系製品がある程度完成された形であることから、東日本に広く分布していたことは容易に想像できる。もっと古い段階の漆系が出土する可能性は十分にあると考えている。また北海道において、早期から晩期まで縄文時代全般を通じて続いた漆系の技法が、次の統縄文時代に継承されないことについては、ヒスイやアスファルトの出土遺跡が激減することと同様に、日本海経由の文化の伝播や交易ルートなどに大きな変化があったことが推測される。



左上段：埴ノ島B遺跡位置図
 右上段：埴ノ島B遺跡遺構配置図
 右中段：漆系状製品が出土した土坑墓(P-97)
 左下段：漆系状製品の出土状況
 右下段：織布状の漆系状製品（左肩）

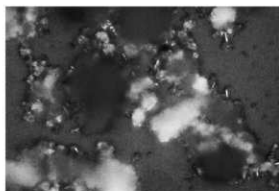


左肩の漆糸 (約10倍)

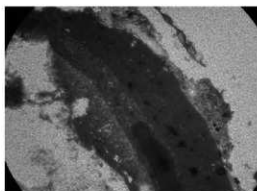


上：縫糸の上に漆塗布
下：コイル状の漆糸

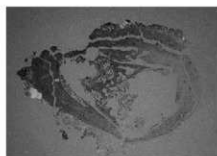
漆糸の構造模式図 (北海道埋蔵文化財センター 田口尚氏作成)



パイプ状ベンガラ (国立歴史民俗博物館 永島正春氏撮影)



塗りの構造



漆糸縦断面 (約15倍)



漆糸横断面 (約15倍)

*漆糸の拡大写真は、北海道埋蔵文化財センター 田口尚氏撮影



北海道の漆製品

上屋 真一（恵庭市教育委員会）

北海道における縄文時代の漆製品出土遺跡数は50遺跡を超える。時期別には縄文時代早期の函館市垣の島B遺跡から出土した装身具が最も古い。その後、前期に帯・紐状漆製品が道央と道東から出土し、後期中葉になると装身具としての漆塗り櫛が道央部にやや多く出土するようになる。小樽市忍路土場遺跡の低湿地部分から漆塗りの結菌式櫛が出土しているが、それに伴う赤い漆塗りの糸玉、漆液の入った土器などがあることから、北海道における漆製品生産を示すほぼ確実な資料と考えられる。

後期後葉には、恵庭市柏木B遺跡や千歳市キウスなどの周墳墓（環状土籬）から副葬品として漆製品が出土するようになり、漆塗りの弓を副葬するという特徴がみられる。

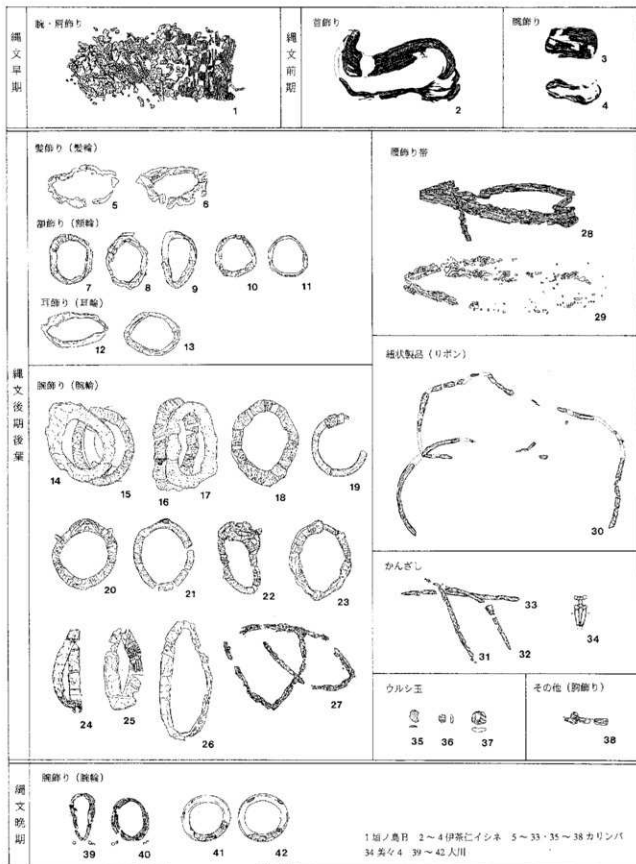
後期末葉になると、石狩から日高地方を中心に漆製品が多く出土するようになる。道央・道南部から遠く離れた道東の根室市や斜里町に漆塗り櫛の分布があるが、地域的な伝播、流通の問題を含んでいる。この時期には石狩低地帯南部の恵庭市内に存在するカリンバ遺跡、西島松5遺跡、柏木B遺跡第2地点などから漆塗りの装身具が多量出土する。これまでに総計200点以上が見つかっており、なかでも漆塗り櫛は北海道の半数以上を占めている。出土状況は、土坑墓から検出されるものが多く、その場合、遺体に装着した状態の副葬品として出土する傾向がある。出土状態から装身具の使用方法的な推定も一定程度可能で、内容も明らかにしつつある。

晩期は、櫛、腕輪、藍胎漆器、垂飾などが出土しているが、量的には少なく、後半期には見られなくなる。

ここでカリンバ遺跡の漆製品について少し紹介してみたい。カリンバ遺跡からは後期末の土坑墓が多量調査されているが、そのうち4基が複数の遺体を埋葬した合葬墓で、漆製品の大半はこの4基から検出されたものである。漆製品の総数120点を超える。器種構成は、櫛、髪飾り輪、額飾り輪、耳飾り輪、髪飾り紐（リボン）、胸飾り、腕輪、腰飾り帯などの装身具類である。これに糸魚川・青梅産の翡翠をはじめ、橄欖岩、滑石、琥珀などの石製、土製の玉と勾玉がある。翡翠やサメの歯などは交易で手に入れた可能性の高いものである。単葬墓からは櫛、腕輪、玉類が少量出土するだけで、副葬品の量に明らかに違いがある。単葬墓と合葬墓にみられる副葬品の質・量の違いは、縄文後期における階層社会を考える際の根拠になるものである。

漆製品のうち、腕輪には形態的に多様なものがみられ、環状の輪に付加して、隆起線、影らみ、突起、ブリッジなどをつけたもの、漆で模様をつけたものがある。胎は、植物質の皮が茎で芯を作り、その上を然糸や草皮で縦巻きにしたもの、動物の皮を素材にした可能性のあるものなど多様である。これらはカリンバ遺跡タイプの腕輪と呼ぶような特色をもち、色についても赤、朱、赤桃色などの彩色が施されている（図1）。櫛は、腕輪と同じように漆の塗り重ねが認められ、表層に各色の朱塗りや施されている。透かし文様の櫛と透かしのない櫛がほぼ同数みられ、透かし文様のある櫛には5通りの基本的な文様パターンが存在している（図2）。

カリンバ遺跡からは低地面の包含層中に赤い顔料が付着した石皿や、顔料そのものの層が含まれており、漆製品製作の間接的な証拠と考えられる。大量の漆塗り装身具の出土は、縄文時代後期末の装身具生産地と流通の問題を含んでいる。



1加ノ島日 2~4伊弉仁イシネ 5~33・35~38カリンバ
34美々々 39~42大川

図1 北海道出土のおもな漆塗り装身具 (櫛以外)

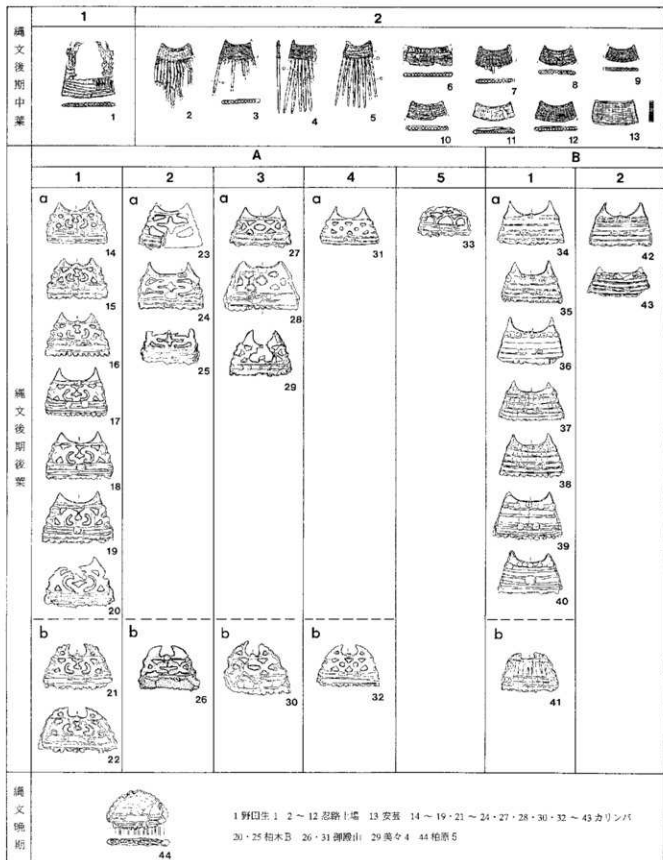


図2 北海道の結縷式漆塗り櫛



討論と展望

西野 秀和

(財団法人石川県埋蔵文化財センター)

討論にあたって、司会の湯尻修平氏は縄文時代の様々な装身具の中、北海道・東北地域で濃密に分布する漆製品、北陸から西日本に広がる珧状耳飾の二つに注目し、出土状況と製作技術の系統から交流を考える方向性を示し、討論を進められた。

まずは、漆製品糸玉・櫛の検出状況の確認で、阿部千春氏（北海道）・小林克氏（秋田県）・荒川隆史氏（新潟県）から、土坑墓での副葬品としての出土が多い事と併せて糸玉の製作技術の報告があった。北海道では漆塗装身具は早期から少数例を見るが、後期中葉以降からの石狩低地帯では状況が一変する。髪飾り・腕飾り・櫛等と多様な装身具が異様とも言える多さで出土し、丸玉・小玉からなる連珠も多い。漆塗装身具が多いのは北海道全体に広がるのではなく地域的特徴と捉えられている。漆塗櫛は北海道の広い範囲で見られるが、型式変遷・生産・流通等の究明は今後の課題とされた。北海道で多い透かしのある漆塗櫛と漆塗糸玉は新潟県まで確認されるが、漆塗櫛の一部に北陸西部出土に類した例が見られ、東北と西日本との境界域に位置する地域性が表れていると捉えられる。

次に、珧状耳飾の地域的な在り方についてであるが、北海道、秋田県、新潟県は早・前期に見られ中期初頭では姿を隠してしまう。山本正敏氏（富山県）は、前期前葉と後葉で制作工程に違いがあると指摘される。円盤状に成形したものに大きめの孔を開けた後に切れ目が入る工程であるが、中・後葉では石材が蛇紋岩に変わり、円盤状に整えるのは変わらないが、始めに切れ目を施した後穿孔する方向に転換しているとされる。また、北アルプス周辺地域に生産遺跡が集まる傾向が知られ、対して消費だけの遺跡もあり、石質鑑定などでの流れが跡付けられたなら興味深いとされた。西田昌弘氏（石川県）は三引遺跡の珧状耳飾に糸魚川周辺を産出地とする不純石灰岩製の例があり、早い段階での交流があったとされた。木下哲夫氏（福井県）は桑野遺跡の珧状耳飾石材に、茶褐色の滑石系と渡来ともいわれる白色石材との違いに注目している。形態差が時期差を映すともいえるが多様性の表れと解釈され、海を越える交流も視野に入れている。米田克彦氏（鳥根県）は山陰地域で前期の珧状耳飾は少数であるが、後・晩期の石包丁形が地域的に偏在して出土している事と東日本系遺物の流入は鳥根県東部までで、西部からは九州との関わりが表れているとされる。九州との交流を示すのは結晶片岩様緑色岩で作られた玉類である。大坪志子氏（熊本県）は九州出土の石製装身具の悉皆的調査から、先の石材が後期後葉に出現する玉類の七割を占めるとされる。原産地は不明であるが、原石採取・供給・製作・分配までの流れが九州在地石材により構築されていたとされる。

湯尻修平氏は装身具の地域性を捉え、各種遺物の形態変遷と製作技術の把握を進める事によって、周辺地域との交流を見ていく方向性を示して展望とした。

混和材から見た土器の移動について1

—土器の胎土観察から導きだせること—

久田 正弘

1. はじめに

私が就職した昭和60年、石川県立埋蔵文化財センターの職員は土器の胎土の中で海綿骨針を注目していた。それは当時海綿骨針を多く含む土器を主体とする能登地方の調査・整理・報告が多く、海綿骨針を含まない加賀地方の土器との違いが際立ったからである。また能登地方でも志賀町（旧富来町）鹿頭上の出遺跡では胎土の砂粒が2種類（久田ほか1989）あることを確認した。その後、田嶋明人・奥田尚氏が主体となり、石川県埋蔵文化財保存協会共同研究「土器の生産と供給」を実施し、その成果が報告（奥田・藤田1991、田嶋・奥田・藤田1993）された。その後、海綿骨針に注目した土器の移動・検討（木田1993・福海2003）がなされ、流紋岩の色調などから小地域内での土器の移動（久田2006）も確認された。これらの成果を元に、混和材の観察から何を導き出せるのかを野々市町末松A遺跡（柿田ほか2005）の古代土師器煮沸具、福井県坂井市（旧坂井町）兵庫遺跡群（山本ほか2005）の弥生土器の観察結果から検討してみたい。

2. 観察と報告

観察方法は土器を肉眼観察により、砂粒の一番多いものと次に多いものに注目し、その特徴を記録したものを類型化した。石川県内では石英基調も存在するが、流紋岩基調が多く存在する。流紋岩は黒・赤・茶・灰・白色が主に確認されるが、1か2の色調を多く含む土器が多いので、以下の胎土に分類した。この分類に海綿骨針の有無が組み合わせて、より細別できる。

胎土A—殆ど砂粒を含まないが、流紋岩基調と思われるもの。

胎土B—黒色流紋岩が主体、茶色や灰色が次に多く、粒子は丸く光沢あり（写真）。

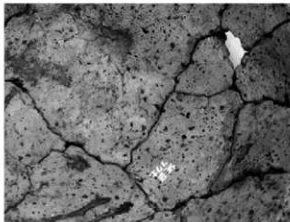
胎土C—茶色流紋岩が主体、黒色や灰色が次に多く、粒子は丸く光沢あり。

胎土D—灰色・白色流紋岩が主体、黒色や茶色が入り、粒子は丸く光沢あり。

胎土E—灰色・白色流紋岩が主体、黒色や茶色が入り、粒子はゴツゴツして光沢なし。

胎土F—流紋岩基調であるが、特徴となる砂礫を確認できなかったもの。

胎土G—石英・長石を主体とし、流紋岩も若干入るもの。



写真（233内面）

流紋岩基調の胎土A～Fは石英・長石・金雲母・角閃石なども含んでおり、胎土B～Eでも違う色の流紋岩も基本的に入り、また胎土Eのゴツゴツした砂粒（私はクズ石と呼ぶ）は、胎土B～Dにも含まれており、胎土EとDとは厳密には識別しにくい。また上記の胎土分類はそれのみで構成されるというものではないことを明記しておく。

3. 末松A遺跡の胎土分析結果

末松A遺跡は石川郡野々市町末松地内（第1図）に位置し、末松庵寺に関連する遺跡群の1つである。器種分類は大分類を最終段階の整形方法で区分（非ロクロ整形をⅠ類、ロクロ整形をⅡ類）したが、口縁部横ナデなどにロクロ整形があるようだが、外面の最終ハケ調整で分類した。長胴甕・小型甕を形態により細分し、その後胎土分類を組み合わせる。

長胴甕1－頸部の屈曲が強く、胴部がやや張るもの。

長胴甕2－頸部の屈曲が強く、やや外半する口縁部をもつもの。

長胴甕3－頸部の屈曲が弱く、口縁部が胴部よりやや広くなるもの。

長胴甕4－非ロクロ整形であるが、1～3類に分類出来ないもの。

長胴甕5－口縁部を面取りするもの。

小型甕1－短い口縁部を持つもの。

小型甕2－頸部の屈曲が弱いもの。

小型甕3－頸部の屈曲が強いもの。

小型甕4－非ロクロ整形であるが、1～3類に分類出来ないもの。

小型甕5－口縁部を面取りするもの

この土師器の分類（第2図）を元にして報告書掲載土器を時期毎に分類したものが表1であり、表2は器種別個体数、表3は時期別個体数、表4は時期別割合を纏めたものである。海綿骨針を持つものは報告番号の後に海を、微妙なものには？を記した。

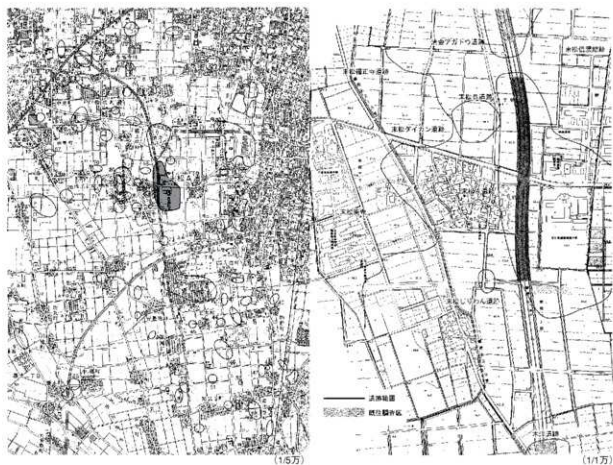
胎土Bが各時期に存在し、ほぼ4割程度を占める。長胴甕Ⅰ1・Ⅰ4・Ⅱ5B類と小型甕Ⅰ1・Ⅰ2・Ⅱ5B類と埴ⅠB・ⅡB類が多く、特にⅡ3期には小型甕Ⅱ5B類が非常に多いことが判明した。胎土Bの製作地を奥田1993・田嶋1993を元に推定してみたい。末松A遺跡の胎土A～Cには海綿骨針を含まないことから、南加賀地方が候補地として有力である。田嶋氏は月影式甕の胎土観察から茶・褐色（胎土C）は小松市梯川左岸に多く、白・灰色（胎土D）は梯川右岸～旧辰口町に多いことを明らかにされ、その周辺に存在する可能性が高いように思われる。当センターが保管している能美市（旧辰口町）の遺物を若干確認した。辰口丘陵の北部に位置する能美丘陵東遺跡群（西野ほか1998）では縄文土器・古代土師器共に胎土D（白色中心）が主体であるが、宮竹うっしょやまA遺跡第3図1に胎土Bを確認した。平野部に位置する高座遺跡・辰口西部遺跡群や小松市千代遺跡・千代デジロ遺跡では弥生土器～古代土師器でも胎土C・D（白色中心）が主体であるが、徳久・荒屋遺跡H地区第3図2（北野ほか1988）に胎土Bを確認した。能美丘陵東遺跡群・辰口西部遺跡群とも定量分析を行っていないが、1・2とも主体的な胎土ではなかった。よって、辰口東部・西部・小松市北部の平野部の可能性は低いと思われる。胎土Bは非ロクロ整形以外にロクロ整形の甕が定量あり、これは北陸型煮沸具と呼ばれている。北陸型煮沸具は古代Ⅱ1～Ⅱ2期に加賀地方で出現し、在地生産されたもの（望月1999）であり、Ⅱ類は須恵器窯周辺で製作された可能性が高いものと思われる。南加賀地方では加賀市北部～小松市南部に位置する南加賀窯跡群と小松市北部～能美市（旧寺井町・辰口町）に位置する能美窯跡群（第4図）が存在する。南加賀窯跡群は胎土に砂粒を殆ど含まないのが特徴（胎土A）であり、胎土Bの製作地の可能性は低いと



野々市町の位置

北陸古代土器編年時間軸 (和田ほか2006など)

- I期 (I1・I2) 7世紀初頭～中頃
- II期 (II1～II3) 7世紀後半～8世紀初頭
- III期 8世紀第2四半期頃
- IV期 (IV1・IV2古・IV2新) 8世紀中頃～9世紀初頭
- V期 (V1・V2) 9世紀前半～9世紀第3四半期頃
- VI期 (VI1～VI3) 9世紀中葉～10世紀中葉前後
- VII期 (VII1・VII2古・VII2新) 10世紀後葉～11世紀中葉前後



第1図 末松A遺跡の位置

	非ロク口整形	ロク口整形
長 胴 甕	<p>1類</p>	<p>5類</p>
	<p>2類</p>	<p>鉢・甌</p>
	<p>3類</p>	
小 型 甕	<p>1類</p>	<p>5類</p>
	<p>2類</p>	
	<p>3類</p>	
鍋		

第2図 器種分類図

表2 器種別個体数一覧表

器種	器種別分類	胎土分類	胎粉の特徴	B2	B2-3	B3	B2-3 B3-1	B3 B3-1	B3 B3-1	B3 B3-1	B3 B3-1	M	V	V-1	V	合計		
I	1	A	群付機量			2										2		
		B	流：黒色主体	3	4	7											14	
		C	流：茶色主体														9	
		D	流：灰色主体			2	1										3	
		E	流：クズ主体	1		1											2	
		F	流：主体不明			1											1	
		G	石炭基質														0	
		2	A	群付機量														0
			B	流：黒色主体														0
	C		流：茶色主体	1		2											3	
	D		流：灰色主体														0	
	E		流：クズ主体	1		1											2	
	F		流：主体不明														0	
	G		石炭基質	1		1											2	
	3		A	群付機量														0
			B	流：黒色主体	2		2											4
		C	流：茶色主体			2											2	
		D	流：灰色主体														1	
		E	流：クズ主体	2		1											3	
		F	流：主体不明														0	
		G	石炭基質	1		2	1										4	
		4	A	群付機量			1	1										2
			B	流：黒色主体			4	5										9
C	流：茶色主体				2											2		
D	流：灰色主体				1											1		
E	流：クズ主体				2											2		
F	流：主体不明															0		
G	石炭基質				2											2		
5	A		群付機量														0	
	B		流：黒色主体			1	1			1							3	
	C	流：茶色主体	1													1		
	D	流：灰色主体														0		
	E	流：クズ主体														0		
	F	流：主体不明														0		
	G	石炭基質														0		
	II	A	群付機量	1		1							1	1	2		6	
		B	流：黒色主体	5	4	5	2	8	1	3	1				1	30		
C		流：茶色主体	1	4	4	4										9		
D		流：灰色主体	2	4	3	3	3	1								13		
E		流：クズ主体	3	3	3	3	1		1	1	1					11		
F		流：主体不明														0		
G		石炭基質	1	1				1								3		
III		A	群付機量			1								1			2	
		B	流：黒色主体	2	4	1											7	
	C	流：茶色主体	1			1										2		
	D	流：灰色主体	1													1		
	E	流：クズ主体	1	1	1	1										3		
	F	流：主体不明						1								1		
	G	石炭基質			2											2		
	IV	A	群付機量			1											1	
		B	流：黒色主体	1	3	1	2				1						8	
C		流：茶色主体	1							2						3		
D		流：灰色主体			1	1						1				3		
E		流：クズ主体			1	3										4		
F		流：主体不明														0		
G		石炭基質	2	4	7					1						14		
合計				27	38	56	8	19	1	10	5	2	4			172		

表3 時期別個体数一覧表

胎土分類	B2	B2-3	B3	B2-3 B3-1	B3	B3 B3-1	B3 B3-1	M	V	V-1	V	合計	
A	群付機量	1	6	5	1					3	1	2	19
B	流：黒色主体	21	27	43	5	9	2	5	3			1	116
C	流：茶色主体	5	6	15	2	6	3					37	
D	流：灰色主体	3	4	8	1	3	4	1	1			25	
E	流：クズ主体	11	8	15	3		2	1				40	
F	流：主体不明				2	1						3	
G	石炭基質	2	4	7					1			14	
合計		43	55	95	9	22	2	13	9	2	4	254	

表4 時期別割合一覧表

胎土分類	B2	B2-3	B3	B2-3 B3-1	B3	B3 B3-1	B3 B3-1	M	V	V-1	V	合計
A	群付機量	2%	11%	9%	1%	0%	0%	0%	33%	56%	90%	7%
B	流：黒色主体	49%	49%	43%	56%	41%	100%	38%	33%	0%	25%	46%
C	流：茶色主体	12%	11%	16%	22%	27%	0%	23%	0%	0%	0%	15%
D	流：灰色主体	7%	7%	8%	11%	14%	5%	31%	11%	80%	0%	10%
E	流：クズ主体	26%	15%	16%	0%	14%	0%	0%	22%	0%	23%	16%
F	流：主体不明	0%	0%	2%	0%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	1%
G	石炭基質	5%	7%	7%	0%	0%	0%	8%	0%	0%	0%	6%
合計		43	55	95	9	22	2	13	9	2	4	254

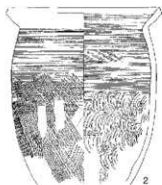
思われる。南加賀窯跡群の西側に位置する矢田野遺跡群（久田ほか2006）第1次調査出土土師器煮沸具の胎土は、小粒で白色（粒子状）の流紋岩が主体だが、胎土が異なる搬入品と思われる土器は1点（第3図3長胴甕Ⅱ4C類）のみ確認された。また、額見西遺跡でも胎土B・C類は主体ではないという（望月氏教示）。

上記の分析例から、旧辰口町では北部丘陵と西側平野部、小松市では南部丘陵と南部の三湖台地周辺も可能性が低いようである。残る地域は辰口丘陵～小松市北部に位置する能美窯跡群周辺（第4図）であり、柿田氏は「能美窯跡群で土師器煮沸具の焼成が定量生産でないにしてもⅡ2期頃から」開始されたことを指摘（柿田ほか2005P319）されている。では能美窯跡群周辺の遺跡を検討してみたい。辰口東部・西部遺跡群では胎土Dが主体なので辰口北群の可能性は低いと思われる。すると残るは辰口南群・小松群・寺井群であり、これらの群は鍋谷川に面している。発掘調査がなされた寺井群（八里向山支群）の須恵器・土師器では白色のクズ石が混和材（望月2004）であり、可能性は低いようである。望月氏に電話で問い合わせると八里向山Ⅰ遺跡では土師器甕では白色以外に黒色も多いとの教示を得たが、私はまだ土器で確認していない。梯川左岸は淡茶色～茶褐色が主体（田嶋1993）であり、末松A遺跡の胎土Bは黒色主体であるが、黒色と茶色、黒色と灰色が組み合わせられるものが殆どであり、胎土C・Dなどでも黒色が従属的に存在している例が多いことから、胎土B～Dは離れた地域を想定するよりも近接した地域を想定すべきであろう。梯川流域でも支流の郷谷川流域に位置する六橋遺跡（本田ほか1997）では胎土D（白色中心）が主体であり、吉竹遺跡では胎土Cが半分（田嶋1993表2）であるという。また八丁川と梯川の間に位置する能美市（旧寺井町）大長野A遺跡の縄文土器は胎土D（白色中心）である。よって、胎土B・C類の製作地は能美窯跡群の鍋谷川・梯川（北側支流）流域を想定し、胎土D類の一部は旧辰口北部～小松市北部の平野部を想定したい。

胎土D類の一部としたのは、274（壘ⅡD類）・306（長胴甕ⅠD類）は海綿骨針を微量に含んでおり、富樫丘陵付近で製作された可能性（木田1993）がある。金沢市額谷カネカヤブ遺跡（谷口1995）では古代の土師器煮沸具32点中19点（59%）に海綿骨針が含まれており、富樫丘陵部周辺が製作地の可能性が高いと思われる。ただ274・306は胎土Eに分類可能かもしれないが、胎土B～Dに関しても破片の大きさや土器の表面の剥離状況などにより観察が不十分な点もいかならないのが普通である。よって、観察時の胎土分類をあえて変更しなくておく。すると胎土Dは小松市北部～金沢市南部で製作された可能性があり、安原川～八丁川の範囲（上流部は手取川）で確認される。しかし、小松市北部～辰口北部の胎土Dは白色が中心であり、金沢市中屋遺跡（澤辺ほか2004）と白山市（旧松任市）八田中ヒエモンダ遺跡（福島ほか1990）でも白色が中心であった。よって胎土Dのなかでも将来は地域細分が出来る可能性もあろうか。胎土Eのゴツゴツした砂粒は金沢市駅西地区（金沢西部）周辺で多く確認され、楠正勝氏によると浅野川・犀川流域に多く、中屋サワ遺跡では少ないようである。また、35・44・133・248・602は海綿骨針を含んでおり、富樫丘陵付近とその下流部の可能性が高いようである。金沢市内では富樫丘陵以外に北部の梅田B遺跡周辺（柿田ほか2002）でも弥生土器などに海綿骨針を多く含んでいるが、主となる流紋岩が異なるようだが定量分析を実施していないので今回は保留とする。胎土Dの中にもゴツゴツした砂粒は存在し、胎土E＝金沢西部のみとは限定しない方がよいと思われる。それは畝田東遺跡群・畝田西遺跡群（和田ほか2006など）の観察表からは白色砂粒（流紋岩が白色が主体だが長石の可能性もあるか）が多いことが何え、末松A遺跡の胎土Dは灰色が主体なので、異なることにもよる。胎土Gは北加賀北部（奥田1991・田嶋1993）で確認され、かほく市（旧宇ノ気町）指江B遺跡（久田ほか2002）でも多く確認された。また能登地方の羽咋市～七尾市までに位置する邑知地溝帯内の遺跡では石英・長石主体の胎土が基本である。金沢市内では戸水B遺跡第2・3・11次調査（久田ほか2002）では胎土E



1…宮竹うっしょやま A 遺跡 (813)



2

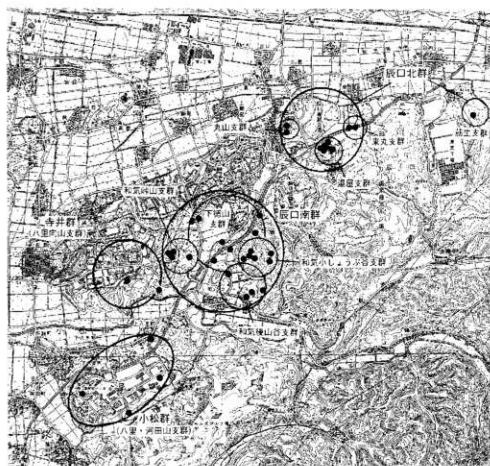


2…徳久・荒屋遺跡H地区 (9)



3…矢田野遺跡1次 (149)

第3図 南加賀地方の胎土B・C土師器 (1/6)



第4図 能美窯跡群分布図 (望月2004)

(1/50,000)

(Dも含むか)が主体だが胎土Gが25%と定量を占める。よって、金沢西部での胎土Gを持つ土器は、北加賀北部(かほく市)を主体とする地域などから運ばれた可能性と宇ノ気川の砂粒が堆積した金沢西部地区で製作された可能性があると思われる。これらを元に、北加賀地方を中心とした胎土分類による土器の製作地を想定してみたのが第5図である。線の境界は現在まだ漸移的なものであるが、遺跡単位で土器の胎土分析を定量を行うことにより、確定して行きたい。混和材の特徴から導き出した土器製作地想定範囲は、周辺に流れる川の影響を受けた結果と思われる、川の上部の地質に左右されたようである。

末松A遺跡の土師器煮沸具は土器の混和材を分析した結果、Ⅱ2～Ⅲ期では最低60%以上を鍋谷川・梯川流域から、最大22～33%を金沢南部・西部周辺から運び込まれた可能性を想定することが可能と思われる。この分析を元に数例の分析を行ってみたい。87SI03は須恵器坏蓋1点が南加賀産であり、須恵器坏蓋1点と土師器煮沸具は全て能美産となり、すべて南加賀地方から運ばれた土器で構成されている。堅穴住居居住者が土器を廃棄したと仮定すると、南加賀地方から土器を供給されていたか、南加賀地方から土器を伴って移動して来た可能性が指摘できよう。また、87SI02では遺構は近江地方に系譜があり、丹後系の青野型長胴甕を持つ住居(柿田ほか2005)である。須恵器坏蓋1点は南加賀産、須恵器坏蓋1点・坏身2点・円面硯1点は能美産、土師器煮沸具3点は能美～金沢南部産、土師器煮沸具5点は金沢南部～西部周辺産の可能性がある。この例では、近江系の人が堅穴住居を作り、須恵器は南加賀地方から供給され、丹後系の青野型長胴甕(433)などの土師器煮沸具は金沢周辺を中心に北加賀地方から供給された可能性がある。これは土器の出土状況などの前提事項の設定次第で解釈が異なる結果を生むが、須恵器・製塩土器などの他の土器の要素と遺構形態・配置などと組み合わせることによって、今後色々なことが引き出せるはずである。

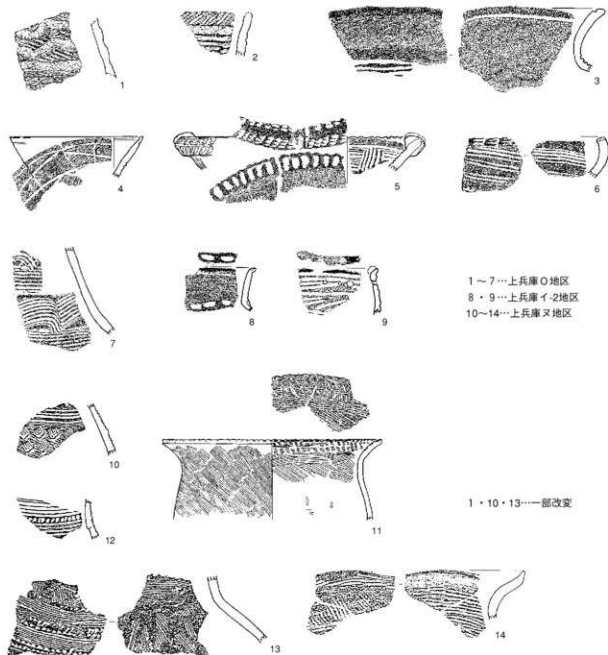
4. 福井県坂井兵車遺跡群の弥生土器

坂井市坂井町兵車遺跡群の縄文・弥生土器(山本ほか2005)を観察した結果、胎土Dが主体であるが、胎土B・Gが少量確認した。胎土Gは文様などから、東海地方西部・石川県・東北系の搬入土器の可能性が高い事が判明したので紹介する。第6図1～7は上兵車O地区出土の胎土Gであり、自然河道を中心に出土した土器群であり、弥生前期後半～中期前半が主体である。1は条痕調整の甕であり、指頭沈線文で波状と直線を組み合わせている。指頭沈線文は石川・富山県では大洞A式前半から出現し、弥生前期初頭(八日市地方6期)まであり、波状文は簡描文の文様を採用したもので、1の時期は弥生Ⅱ～Ⅲ期初頭と思われる。1は石英が一番多く、次が長石で海綿骨針を微量含んでおり、搬入土器の可能性が指摘(山本ほか2005)されている。2・3は長石・銀雲母を多く、石英を含み、2は縄文を持つので縄文土器の可能性があろう。4は0.5mm以下の砂粒を多量に含むが、石英・長石が多いが暗灰色流紋岩を含むが目立たないので、在地製作の可能性もあろう。5～7は東海西部系の条痕文系甕であり、石英・長石を多く含む。5の外表面は荒れているが、条痕調整である。8・9は上兵車Ⅰ-2地区出土であり、縄文後期中葉～晩期末葉の土器が主体である。8は0.5mm大の石英を多く含み、晩期中葉の中屋式の深鉢と思われる。9は長石と銀雲母を含み、縄文の地紋に綾杉状の文様を施し、大洞C2式併行の浅鉢と思われる。10～14は上兵車Ⅱ地区S D45から出土した土器であり、磯部式併行の土器が主体であり、近江系の横模甕(14)などが存在する。遺構からは条痕文土器の出土は無く、三角列点文をもつ土器(13)や直線文を8段以上複帯構成する土器もあるので時期幅を持って八日市地方7～9期としておく。10・11は斜行短線文を持つハケ調整の甕であり、斜行短線文は石川～新潟県で採用されているが、福井県では不採用の文様(赤澤徳明氏教示)であり、小松市八日市地方遺跡でも少ない文様(下濱貴子氏教示)であるという。斜行短線文は八日市地方遺跡では8期には存在し、7期の存在を予測(福海2003)



第5図 胎土別土器製作地想定図

され、下濱（旧姓福海）氏は金沢市中屋ヘシタ遺跡（景山2002）の資料から出現を八日市地方6期と発言（2005年上越市吹上遺跡検討会）された。10は1mm大の砂粒で石英・白クズ・黒色・長石とメモを取っており、胎土GかEの可能性ある。11は大粒の胎土Dであり、在地の混和材と同じである。ハケは2種類を使い、外面と斜行短線文を同じハケ（小口の中央部が丸く突出）である。口縁部内面のハケは荒いハケであり、胴部内面には大きなナデ押さえがみられた。12は石英・白ダク石を含む土器である。



(13)

第6図 坂井兵庫遺跡群出土土器

福井県では海綿骨針を含む土器は下屋敷遺跡・大味遺跡で確認（久田1998）したが、微量なので基本的には福井県では存在しないものと思われるが、確証はない。また富山県では高岡市石塚遺跡や射水市（旧新湊市）高島A遺跡・作道遺跡（金三津2006）で在地の土器の中で海綿骨針を微量含むものがあり、氷見市鞍川中B遺跡（廣瀬ほか2006）では基本的には海綿骨針が入り、富山市（旧婦中町）でも海綿骨針が入る遺跡（大野英子氏教示）があるという。また新潟県長岡市（旧和島村）奈良崎遺跡の弥生土器・土師器は胎土Gで海綿骨針を含んでいる（春日ほか2002）。そして上越市では吹上遺跡（笹沢ほか2006）では少量確認され、海岸部の遺跡では在地の土器に確認され、佐渡の土器では多く入る例があるという（笹澤氏教示）。これらの事から、第6図1は文様からみると富山県の土器の可能性もあるが、富山県内に胎土Gを確認していないので可能性は低いものと思われる。また新潟県は胎土的には可能性もあるが、文様の的には可能性がない。よって、胎土・文様から第6図1・10は石川県内の金沢西部を含む北加賀地方でないしそれ以北からの搬入土器の可能性が高い。11は胎土的に在地の土器と変わらないので当遺跡周辺で製作された模倣土器か、石川県内の人が当遺跡周辺で製作した土器の可能性が高いことが判明した。

5. おわりに

今回の報告をした契機は2つある。1つは退職した松尾実氏が末松A遺跡の北側に位置する清金アガトウ遺跡（第1図）の報告書作成時の土器観察を私の周辺で行っていた際に、古代土師器壺のなかに梯川流域産の胎土Cを見たことである。2つ目は末松A遺跡第1次調査担当者の米澤義光氏からの製塩土器についての問い合わせである。その問い合わせにより、第1次調査出土土器を観察する機会を持ち、胎土Bの土師器煮沸具が多いことを確認したことによる。本来は米澤氏による製塩土器の報告も合わせて行う予定であったが、時間の関係などで間に合わなかった。今後製塩土器、末松A遺跡の別調査区資料（山田ほか2006）や清金アガトウ遺跡（松尾ほか2006）の土師器煮沸具の分析などを継続して報告していきたい。

土器の胎土観察において、田嶋・奥田氏による胎土分析の重要性が指摘されて10年以上経過したが当センターでは現在でも砂粒の大きさを中心にした含有量と海綿骨針の有無を記載することが主流である。しかし、金沢西部の遺跡群に胎土的特徴があったからだと思われる。観察表から砂粒の色調は白色（流紋岩）が主体となることが伺え、石英基調の土器も識別可能であり、海綿骨針との組合せによって金沢西部地区での土器の製作と供給を考える上での基礎的データが提示され始めたばかりである。また金沢市埋蔵文化財センターが3月に報告予定である中屋サワ遺跡の弥生中期末葉の土器群の中にも胎土B・Cが微量あることを確認した。今後砂粒に注目すれば、北加賀地方への南加賀地方からの土器搬入が明らかにされるものと思われる。

同じ地域内での土器搬入は、近畿地方においては色調・混和材の違いから生駒西麓産土器は簡単に識別されている。生駒西麓産土器は北陸地方でも石川県・富山県でも確認（久田2003）され、その後東の場タケノハナ遺跡（宮川ほか2004第114図604と未報告1個体）と白山市（旧松任市）野本遺跡（金山2002第21図206）で確認された。器形・文様だけではなく、混和材の特徴（石英基調・流紋岩基調の認識、石英の形状と透明度、流紋岩の色調・粒子の形状、白色粒子など）を認識して記載することによって、他地域からの搬入土器・模倣土器の抽出以外に、同じ地域内での土器の移動が認識できる可能性を指摘したい。

今回本稿を纏めるにあたり、資料観察などで各氏にお世話になった。氏名を記して謝意としたい。

赤澤徳明、大野英子、金三津英則、楠 正勝、後藤浩之、笹澤正史、下濱貴子、田嶋明人、田中昌樹、

参考文献

- 奥田 尚 1991 「月形土器の産地とその移動」『加賀焼の砂礫観察』〔石川県埋蔵文化財保存協会年報2〕(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 奥田 尚 1993 「越前焼の砂礫構成」『石川県埋蔵文化財保存協会年報4』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 柿田祐司ほか 2002 「梅田B遺跡Ⅰ」石川県埋蔵文化財センター
- 柿田祐司ほか 2005 「末松遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 景山和也 2002 「中屋ヘシタ遺跡」『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』金沢市埋蔵文化財センター
- 春日真実ほか 2002 「奈良崎遺跡」新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金山弘明 2002 「野本遺跡Ⅲ」松任市教育委員会
- 金三津英則ほか 2006 「作道遺跡発掘調査報告」射水市教育委員会
- 木田 清 1993 「中村井手遺跡」松任市教育委員会
- 北野博司ほか 1988 「辰口西部遺跡群Ⅰ」石川県立埋蔵文化財センター
- 笹澤正史ほか 2004 「吹上遺跡」上越市教育委員会
- 澤辺利明ほか 2004 「中屋遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1993 「混和材からみた土器の生産と供給」『石川県埋蔵文化財保存協会年報4』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 谷口宗治 1995 「額谷カネカヤブ遺跡」金沢市教育委員会
- 西野秀和ほか 1998 「能美丘陵東遺跡群Ⅲ」石川県立埋蔵文化財センター
- 久田正弘ほか 1989 「鹿頭上の出遺跡」富永町教育委員会
- 久田正弘 1998 「北陸地方西部の土器の動き」『永遠跡発掘調査資料図譜第三冊』永遠跡発掘調査資料図譜刊行会
- 久田正弘ほか 2002 「戸水B遺跡Ⅱ」石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘ほか 2002 「指江遺跡・指江B遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2003 「弥生時代における影響関係について」『石川県埋蔵文化財情報第9号』石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘ほか 2006 「矢田野遺跡群」石川県埋蔵文化財センター
- 廣瀬直樹ほか 2006 「鞍川中B遺跡」氷見市教育委員会
- 福島正実ほか 1990 「八田中遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 福海貴子 2003 「八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡Ⅰ(第1分冊)』小松市教育委員会
- 藤田邦雄 1991 「窯出土遺物の砂礫様相—加賀窯」『石川県埋蔵文化財保存協会年報2』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 藤田邦雄 1993 「窯出土遺物の砂礫様相—越前窯」『石川県埋蔵文化財保存協会年報4』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 本田秀生ほか 1997 「六橋遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 松尾 実ほか 2006 「清金アガトウ遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 宮川勝次ほか 2004 「東的場タケノハナ遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 望月精司 1999 「北陸型煮炊具の出現と成立過程」『石川考古学研究会会誌』石川考古学研究会
- 望月精司 2004 「飛鳥・奈良・平安時代」『八里向山遺跡群』小松市教育委員会
- 山田由布子ほか 2006 「末松遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 山本孝一ほか 2005 「坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ(遺物編)」福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 和田龍介ほか 2006 「畝田東遺跡群Ⅲ」石川県埋蔵文化財センター

石川県埋蔵文化財情報
第17号

発行日 2007(平成19)年3月30日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本唯文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター